
ある日、天使が堕ちて来た！

かとう みき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日、天使が堕ちて来た！

【Nコード】

N6406X

【作者名】

かとう みき

【あらすじ】

ある日天使が堕ちて来た、と思ったら異世界人だった。図々しくも弟として家庭に入り込み、天然おバカを装う腹黒い異界人。最初に罠にかかり、弱味を握られ、言質をとられ、仕方なしに色々協力する内に、どうやら退屈な毎日を送っていた筈の日常は、異界人が来る前から相当オモシロイ世界だったと気付く羽目に？大嫌いな異界人を元の世界に戻して、さっさと日常を取り戻す為に頑張る日々。中編です。

（プチBL注意）

恋愛要素はホノ力過ぎて気付かないかも……な程度ですが、一応片想いすれ違いの両想いだったりします。

1話 天使！？

ある日、天使が堕ちて来た。

いや、比喻でも冗談でもなくてさ。本当に、実際に、堕つこちて来たんだ。

白い翼を持ってた。

ふわふわの、柔らかい羽毛。その純白の輝きは、マジで目がチカチカする程に眩しかったさ。

でも、もっと眩しいのはその髪。そして、その顔。

俺はその髪と美貌に、先ず思ったね。

「すげえ。……………」

何か云おうとして、何とも云い難い事に気付いた。

貧困なボキャブラリーじゃ、せいぜい綺麗とか美しいとか麗しいとか、もうそのものでしかない言葉しか浮かばないんだが、余りにも本気で「綺麗」なものだから、かえって口には出来なかったんだよ。

輝くばかりのって云うが、実際に輝いてんだもん、その人。って人間じゃないけどさ。

白くって綺麗で、ああ、清潔そうってのピッタリかも。
無垢ってのかな。

「すげえや。」

銀色に青とか碧とかを溶かしてグラデーションをかけたみたいな髪は、見事に波打っている。

白つてより、クリーム色って感じの肌は、柔らかそうで、滑らかで、ホクロひとつないんだ。

キョトンと見上げる眸は、何てえか、紫色でさ、バツバサのまつ毛が頬に影を落として、キョーアクに可憐、なんだ。

ああ。

認めるしかないだろう。

俺は恋をしたんだ。

この天使に。

だからと云って、一足飛びにそんな事をしなくても良かったのでは無かるうか？

我ながら、そう思わずには居られない。

俺はベットに座り込んで煙草を吸っている。未成年だが見逃してくれ…吸わずにはおれないんだ。

見下ろせば、心臓に悪いキレイな生き物が居る。

白い手足を投げ出して、呆然とした眸が天井を見上げている。シミひとつ無かった肌には、今はいくつかの擦り傷と鬱血の痕が

あつて――。

そう。つまるところは。

犯っちまったのである。

……………。

だってだって、どうすれば良かったんだよ！？大体やりたいサカ
リの17才の部屋に堕ちた天使が悪いだろう！

天井に穴があいてるとか、窓が割れるとか、せめてそんな現実味
が有れば、まだ違ったかも知れない。

けど、実際には、音もたてず、いきなり空間に出現して、トスン
とカーペットの上に落っこちたんだよ。へたりこんで、キョトンと
した眸で俺を見上げてた。

驚いたのはこっちだろう！？

薄い衣は、布が少な過ぎた。胸元は刺激的な迄に眺めがよく、立
てた膝もヤバかった。

おまけに、翼まで生えてんだよ。

現実だなんて思えるかよ。

いや。

例え、夢にしろ。

そんなつもりはなかった。

恋を……………してしまつて。

好きに……………なつて欲しいと、思つて。

優しく、接するつもりで……

なのに。

その手を取って、その髪だか、肌だから…薫る匂いにクラッと来て。

次の瞬間

思わず。

抱きしめてしまっていた。

そうしたら、ますます強く香り、相手は呆然としてるのか抵抗らしき抵抗もなく、………なだれ込んだ。

うわあ！

めっちゃケダモノって云わねえ！？

自分で自分がイヤになるだろう。俺だって！俺だって、まともに口説きたかったのにつ！！

しかし、犯っちゃったもんは仕方ない。

チラッと、見下ろすと……紫の眸はようやく判断力を得たように瞬きを二度三度、でもって、視線が……真っ直ぐ、俺に来た。

「……………」。

すこし、細まった眸に、俺はドキドキした。

ケダモノ…とか、最低…とか、そんな台詞を予想してはみたが、そもそも日本語なんて出来るんだろうか？

しばらく、無言で、ニラみ合った。

ちよつとドキドキした。

見つめ合ってるみたいで……ってノーテンキかよ俺は！とも思うが、多分、俺が動揺しまくっている事なんて、端からは全然解ないだろう。

俺はクールな美少年と呼ばれている。

性格を無視したその評判が根強いのは、俺が無表情で寡黙だからだと思われる。

たまに笑うと天使のようだと云われるが、そいつらは結局天使を見た事がないんだな。とは云え、俺も初めて見たのだが。

大概、つらつらと考えている内に、俺と相對する人間は何らかの決断を下すもので、俺はそれを受け入れるか否かを検討するだけで良いんだが、この天使は違った。

じいっと、俺の眸を視つめていた。

何も云わずに。

何ひとつ、見逃さない眸で。

不思議な事に、その眸には憎しみや怒り等のマイナスの感情は浮かんでいない様に見えた。希望的觀測に過ぎるだろうか？

それでも、その澄んだ眸は、そんな毒っぱい感情とは無縁のように思われた。

このまま。
ずっと。

朝まで見つめ合うのも悪くない。

悪くは無いが……逃避が過ぎるだろうよ、それは。
逃げるのは好きじゃない。

だから、仕方なく、覚悟を………決めた。
問い掛ける。

「名前は？」

紫の眸が揺れた。

そんな質問は予定外だ、と、戸惑っているようにも見えた。
けれど、淡く染まった柔らかい唇が開く。

コクリ。

俺は息を呑んだ。

「そちらの……名は？」

サラリとした声。

声までも澄み切って、清らかな癖に、どうして「あんな香り」
を持っているんだろう。

そんな事を思いつつ、俺は応じた。確かに、俺が名乗るのが先だ
と思われたから。

「川崎洋。ひろしと呼べるか？」
「ルウイリア」

「ルウイで良いか？」

ルウイは頷いた。

寝そべったままで。

どうやら動けないらしい。

「……………バスルームに行くか？」

色々考えて、俺は云った。

ルウイも色々考えるのか眉を寄せて黙る。

「……………む」

考えているらしい。

「要らない。」

応えた。

動けないなら運ぼうと、云おうとした言葉は飲み込むしかなかった。ルウイが眸を閉じた瞬間。

彼は、光の球体に包まれて、輝きが消えた後には、シミひとつない肌が、薄い衣に包まれていたから。

傷も、情交の痕跡も、何ひとつなかった。

その証拠に、ルウイはひょいと軀を起こして首を傾げた。

「もしかして、驚いてるの？」

「……………」

重々しく、俺は頷いた。

2話 異世界人かよ（前書き）

お久しぶりの「天使」です。

HPの活動報告でも書きましたが、猫被りの世界と微妙にリンクするので、書きたくまりました。

しかし多少は色々出ましたね〜天使⇨賞金稼ぎ等…なんて設定は関係ナイので出ませんが。

でも書きたい台詞はラスト近い、と云うか完全ラスト。

テンポよく読める話を目指すので、最後迄主人公はガッツ&天使にもガッツリ邪険に突っ走る予定です。

やっぱり書きやすい、この話。

でも読んでくれる人居ない……とグレテ居たのですが細々と最近覗いて戴けて、ちよつと嬉しいですww

ボチボチのんびり更新しますので、お付き合いの程、宜しくお願い致しますm（．．）m

2話 異世界人かよ

ちなみに、光に包まれた後のルウイには翼は無かった。そうしてみると、人間に見えなくもない。

「天使？誰が？」

「お前が」

俺は今回、無口で有るのも時と場合によると学ばされた。

幼い頃に、余りに喧しい口を、ガムテープで封印された過去を持つ俺は、必要以上に口を開かない人間に成長したが、生態のはつきりしない相手との対話には、饒舌なくらいが調度良いのかも知れないと思った。

彼も……そう、男だったよ。きつぱり、しっかり男だったよ……いや気付いてはいたさ！だってしちゃったしな！？

でも、天使なら男でも良いかなと思ったのに！天使なら、男みたいでも、男では無いかも……と思ったのに！

女で無いまでも男で無ければ良かったのになあ……。

だが俺は、文句の云える立場ではなかったのだ。

彼も「コチラ」の世界でおかしく見えないよう振る舞う為に、俺に質問を浴びせ掛けた。

ルウイの語ったトコロによると、こつである。

「天使つてのは、女神の使いだからさ。俺は単なる事故だし。うん、コチラで云うなら魔法使い？なんだよ。もちろん人間。」
「人間が何で、そんな髪をしている。」

眸もだ。紫なだけなら、珍しい乍らも有るだろう。よく見りゃ…よく見なくても、左右色違いなのも有るかも知れない。

だが。

片方はキラキラと輝いて紫のグラデーションを基調に色を変じたり、淡いピンクにも見える薄い紫が……光の具合で有り得ない程、キツチリと漆黒に見える瞬間が有る。

髪は髪で光を零すし……有り得ねえだろうよ。

アレだろ？よく云う光り輝くだの、煌めく眸だの、煙る。色だのって……単なる比喻だろ？実際に光の粒子がキラキラ零れたり煌めきが滴り落ちたりしねえだろうがよ！？

気迫を込めたが、天使はへっぴりと答えた。

「フライサつて星でね、東国の出身の母親から生まれたから。つて、ああ、そうか。フライサも解んないね……異世界から来たから？つて云うのが正しいのかなあ。」

事もあるうちに異世界人だった。

「でも先祖は地球人。」

情報が多過ぎだった。

「……………。何で。」

「地球人が何人か神様方の仲間入りしてえ、うちの世界に根付いちやったんだもん。もう何万年か前？リー家って結構有名な一族でね。父方の祖母がその出身なんだよ。」

「何万年も前に地球人が神様にね。」

石のオノでも持っていたかも知れない。

もはや突っ込む気にもなれなかった。突っ込んで更に欲しくナイ情報が入るのを防いだとも云うな。

これが現実だとしても、こんな知識は無駄以外のナニモノでもナイ。

「俺？俺はねえ、フライサの北の国、^{デン}転国の王子でねえ。」

デン……ゴク？しかも王子様と来たか。

おまけに魔法使いだし？

流石に頭痛を覚えた俺は、こめかみをマッサージせずにはおれなかった。

「翼は翔ぶ為のもので、もちろん生れつきじゃないよ？ちょっと他所の世界に遊びに行こうとして跳んだら、何故か此処に出ちゃってねえ？」

ねえ？じゃねえよ。

それで、男相手の初体験させられた俺は何なんだよ莫迦野郎。シクシク。

「とりあえず、目に付いた人間に尋ねようと思っても、口聞いてくれなきゃ翻訳魔法が使えないしさ。」

それでニラミあつてたんかい。

「いきなり強姦されたしさ？」

「……………」

冷汗だらだら心臓バクバクである。

強烈な単語だ。……………今の俺には発音出来んぐっ！！

しかしルウィは余りにも、あっけらかんとしているので、俺は謝る機会を逸してしまった。

「ところでさあ。地球に来たからには、観光して帰りたいんだけど、俺のカッコって変じゃない？」

「メチャ変に決まっとるわ。ボケ。」

「エー。どの辺がぁ？」

「全部だ。全部！」

先ず髪の色。その長さ！キラキラとグラデーションと同じく眸もだ莫迦野郎！

いや、バンドの人を差別するつもりはナイのだが。最近のソレ系バンドはモノホンさながら……………そういやキラキラも付けてる場合有るな。天然では有り得んが、コレが混じっても……………いや、やっぱりダメだ。

こいつの場合は美少女だ。普通に染めたらなおさら美少女で、キラキラ捨てても、やっぱり美少女だ。

「その長さなら女装か……。」
「短くする。」

ルウイが云った途端、彼の髪は短く……なった。

「……………」

魔法。

魔法ね。
すげエ。

「何？」

キョトンと見上げてくる美少女顔に、俺は首を振った。
とんでもないモノと関わってしまった。
今更だけど、そう思わずにいらなかったね。

「色とキラキラも。眸と髪は日本なら黒っぽい色に。グラデ無し、
色の变化無し。服は……この辺の雑誌見てみる。」
「う……んと。」

雑誌を開くでもなく、彼は考え込む。
チラリと見上げてきて。

「記憶……見せて欲しいなあ？なんて。」
「……………！」

ガタンッ！！

俺はベッドから飛び下りて壁に張りついた。

「犯したくせに。」

「うっ……………」

攻撃のダメージは大きいが…………、それとこれとは別だっ。

「いきなりで、ビックリしたし。」

「……………」

ズキズキツ、と突き刺さる何かを感じる。

「初めて…………だったのに。」

バツサリ…………切り捨てられたも同然である。
息もたえだえ。

「記憶は…………ダメ。他の、事…………なら。」

このさい何でもします。すみません。ゴメンなさい。
心で土下座した。

しかし言質は与えない、俺は我ながら姑息だった。

「記憶つて云つても、知識しかもらないからあ。君の感情や何を
経験したとかが、解る訳じゃ無いのにイ。」

「それを早く云え。」

と云うか。

「何故それを云わなかった。」

「…………うん。だって、最初は全部見る気だったから。」

俺が、彼を殴り飛ばさなかったのは、ひとえに罪悪感ゆえである。
う。

何とか、けとばしたい欲求を押さえ込む事に成功した俺は、ルウ
イに尋いた。

何となく、イチマツの不信を抱いたのである。

「初めてだったってのは、本当だろうな？」

「…………。エート…………。」

「ホ・ン・ト・ウ・なんだな？」

低い声で、ほんの少し眸を細めると、ルウイはあさつての方向を
見上げた。

「ムリヤリは…………初めて…………かな？なんて」

俺は、自分の自制心が此処まで保つと、今回初めて知ったぜ。い
つもの俺なら半殺しだな。間違いない。

しかし、これだけ腹が立つのに嫌いになれないとはコレ如何に？
実際、やな相手に出逢ったもんだと俺はため息をつかざるを得な
かったね。

さつさと帰れ！
異世界につつ！

3話 帰れよ異世界に

あれから3日。

異世界から来た魔法使いの王子サマとやらは、俺の家に居ついている。

物置と化していた部屋を、いつの間にやら整えて、そのくせ俺の部屋に住み着いているのである。

「お前、ちちんぷいで用意した部屋があるだろうが！俺のベッドで寝るんじゃないエ！」

目が覚めたら、こいつをベッドから蹴り落とすのが、もはや日常化していた。

寝顔にドキリとするのは、絶対に知られてはならん秘密である。

「ちちんぷいって何だよ。別にイ、一緒に寝たからって減るもんじやないしイ。」

「減るわ莫迦！」

「何があ？」

「神経がだ！」

その代わりに俺の口数は加速度的に増えている。

こいつを前にして、無口でいられるようなら、人間が出来ているとしか云えまい。

「減るような神経があるの？」

へロリとそんな事を云うのは、この口かつ！
えっ？この口か！？

「いひゃいゝゝつ」

口の両端を引っ張っていると、後頭部をガツン！とやられた。
俺が口より手足を出すのは、多分母からの遺伝では無かるうか？

「朝から弟泣かしてるんじゃないよ。」

キレイな顔に似合わぬ毒舌も、多分母に似たのだ。

「お兄ちゃんだろう！？」

俺は声を大にして云いたい！

「誰がお兄ちゃんだっ！」

ルウイに怒鳴ると、ガツ！！と蹴りを入れられた。

「てめエだ！アホンダラ！！」

お母さん。

あなたはダメされています。
それは単なる暗示ですう！

例え口にしたとしても、益々俺の傷が増えるだけだろう。

可哀相すぎるぜ、俺っ！！

誰にも理解されない苦しみを、この3日で知り抜いてしまった俺
サマなんである。

クッソオ。

それもこれもルウイのせいだ！

可愛い顔して俺の弟におさまって、ちゃっかり母のお気に入り
の息子として居着いている、あの魔法使いな王子サマのせいなのだ。

ム力つくのは当然なんだが、何でか強く云えねェんだよなあ。

俺は嘆息して立ち上がった。

蹴りの痛みにつめく俺を置き去りにして、ルウイの奴は母に連れ
られて朝飯にと部屋を後にしていた。

ひっでエよなあ。

二人して登校していると、色々な奴が声を掛けてくる。
いつも通りの光景だが、いつも通りでナイものもある。

「川崎イ。おはよ。」

「よう。川崎兄弟。」

「洋くうん。ルイくん。オハヨー♪」

俺の名前だけでないって事にプラスして、ほんの少し…女の子が
増えている。

しかも、女はともかく男も少し増えてる気がするんだが。

危ねエなつ。つたく。

己を棚に上げていると承知で、俺は苛立ちを覚えた。

元々、俺はかなりモテるって自覚がある。だからこそ、ルウイに向かう視線も、うるんなモノは見分けられるのだ。

まあ、俺の場合、無口すぎるのと無表情とガラが悪いのとで、顔がお人形みたいにキレイでなけりや人気もなかったと思われるんだが、現実の俺は黙ってりやヒジョーな美少年だったりする。

黒目勝ちのでっかい眸に、陽に焼けにくい肌はBox育ちの連中みたいに色白で、うすい唇の形も良いし、鼻筋すつきり細眉キリリの美少年。

無表情さえ女の子の人気の的。
なのである。

コレだけ美少年でなけりやあ、口を開いた時のガラの悪さで、ついでに目付きも少し悪いかも知んねエから、クールなんて誤解を受ける事もなかったらうな。

多分、いつもより周囲がうるさいのはコイツのせいだ。

人当たり良く。

「おはよう。あ、知子ちゃん昨日はありがとう！田町イ、これ返すう。次の貸して♪」

ニコニコニツコリ。愛想を振りまく、お調子者の王子サマ。

3日で溶け込みやがった。

ちなみにコイツは学校の奴らには暗示をかけてない。

「メンドーだから。」

書類だけゴマカシて、その辺だけ少し暗示も使ったか知れねエが、基本はその「まんま」で来やがった。

ダメしてるのは一緒だけだよ。
何せ。

「体が弱くて」

「ずっと、空気の良いところで育てられた」

「丈夫になってきたから」

「戻って来た」

「別々に育てられた俺の弟」

だったりするらしいからさ。

3日前はびびった。

起こしに来た母親に、隣りで寝てるこいつを、どう説明しようかってパニックだった。

無表情に母を見上げた俺は、けれど一言も口にしないまま事態を悟るハメになった。

「仲良くなれたらしいな。覚えちやいねエだろうが、幼稚園上がる迄は双子ってのは四六時中一緒にいねエとやってけねエのかつてくらい、ひっついてたんだ。十年以上も離れ離れだったからって、弟イジメなんかすんなよデメエ。」

普段の怒ったような口調で母は云った。

「あたしゃあね。何年もほっといた分、留衣をヒイキする事に決めたからね。十分覚悟して兄弟喧嘩をするんだね。」

傲然と笑う母に、俺は逆らえる気力もなかった。

家族にさせてね、とか云ってたが……こう来るか。

俺は呆然としたね。

そして3日間で、まるで十年一緒にいたかのごとき図々しさで、俺に錯覚させる。

本当に弟……な訳ねーだろ！

しつかりしろっつ！俺っ！！

自分自身が信じられなくなって来た今日この頃。
やっぱなあ。

人間平凡が一番って云うけど、本当だと思うね。

魔法だなんだってのは邪道だろうがよ。他の奴に……それも母親に、思いつ切り違う記憶押し付けられる身にもなってみやがれ。

周囲じゃなくて自分の方がおかしいかも……なんて、ほんの一瞬间でも思っちまうじゃねエか。

ちくしょう。

早く帰れよ異世界につっ！

クラスも一緒。

席も隣り合わせ。

うっとうしいったら、ありやしねエ。

最近の……つっても3日間だが、俺は窓の外ばかり眺めてる。
登校は義務じゃねエから、来るのをヤメようかと思っただけだ
が……するとコイツも行かねエとか云うし、二人キリの空間なんか
嫌すぎるだろう。

諦めて、登校する俺。

今時、珍しいリアル登校は……めっちゃエリート集団な筈だが、学
校の奴らを見てそんな風に思えた事ねエし、コイツがそこに加わっ
たら尚更思えねエ。

せめて窓際の席だった事を幸運に思うべきなのか？俺の幸せって
ささやか過ぎるぜ。

「川崎！」

「はあい！」

俺が応じる前に可愛らしく手を挙げるのは、俺の「弟」……………
に、成り済ましたルウイだが…。

「…………お前じゃない。川崎洋！」

ま、教壇に見向きもしねエ奴^{オレ}の方だろうな、教師がニラむ相手は
そうでなくとも、普段から俺を毛嫌いしている数学教師は、他の
奴にはイヤミっぱい乍らも穏やかで、それはルウイに対しても同様
だ。

俺にはしょっちゅう怒鳴るクセによ。

俺は黙って立ち上がり「端やん」と呼ばれる端野センセイを見た。
向こうは「無表情にニラまれた」と思ってるかも知んねエ。

「問2だ。」

俺は黒板の前まで行って、カカカツと白墨で書きなぐる。つうか今時チヨークってどうよ？懐古趣味にも程がある。

まあ俺は小学生からリアル登校で慣れてるけどな。

そして手早い割に俺の板書はかなりキレイだ。これも小学生4年生まで、お習字に通った成果だろうか。

横目に見た端やんは悔しそうだ。

俺はフンツとせせら嗤ってやる事を忘れずに席に戻る。

バゝ力。お前の出す問題なんてタカが知れてんだよ。

思い切り莫迦にした「心の声」を眼差しにのせた。

俺は無表情なくせに、見下す目付きだけは得意なのだ。

端やんは歯を食いしばり、ギリギリと不気味な音をさせて俺を二ラんだ。俺の心の言葉は性格に届けられたようである。

端やんは耐えた。

しかし不機嫌は隠せず、八つ当たり気味に声を張り上げる。

「伊藤！問3だ！」

「エゝゝ？………解りません。」

「田町っ。お前はどうか？」

「出来る訳ねえでしょ。高2の問題と違うでしょセンセー。」

ヘロッと応じる田町に端やんは、ほんのちよっぴりキレたらしい。

「どいつもこいつも！川崎なんぞに負けて、悔しいと思わないのか！？」

「勝てると思う方がおかしいってセンス。」

田町ののんきな声にかぶさるように、みんな好き勝手に声をあげる。

「川崎くんわ、人間と違いますう。」

「小学校んときは、天才少年でテレビに出たんだよね？」

「顔も頭も良っから、性格ゆがんでんだな。」

本気で好き勝手云い放題かこいつら。後で一発ずつ殴ってやる。

「川崎っ！もう良い、お前やれっ！出来なかったら罰掃除だっ！！！」

ヒスカよ。別に出来るから良いけど。

そう思っで、立ち上がろうとしたら。

「はあい。」

ルウイがトコトコとフワフワの茶髪をゆらし乍ら前に出てサラサラっと解きやがった。

異世界人のくせに、あなどれねーぜ。ったく。

「出来ましたけど？」

一瞬、静まり返っちまった教室の雰囲気なんぞなんのその。空気を讀まないルウイは、

キョトンと端やんの顔を覗き込むように見上げた。

「……………あつてな……………」

俺には怒鳴っても、ルウイには怒れんらしい。ま、気持ちは解るが。つうか、俺の事だって最初はベタ褒め状態だったもんな。

うつとうしくって「うるせエ！てめエの出す問題ぐらい解けねエ方がおかしんだよっ！」とやらなきや、今でも不倶戴天の敵扱いされる事もなく、お気に入りやってたんだろうな……………。

さっさと怒鳴っというて正解だったな、俺！

莫迦なフリして結構賢い。

ルウイをそんな風に評した奴が居た。

そんなもんじゃないね。その程度の猫つかぶりなら、まだ可愛気があるってもんだ。

こいつは、人の油断を常に誘っているところがある。

もしかして、あなどれねーなって云う、相手の感情さえも、侮れないけど……に変えさせる。底が知れてる奴なら、恐くねエからな。そこまでの奴だ……と、自分の事を思わせて立ち回る。

一時の油断もならねエ。

ダメされて莫迦を見るのはゴメンだ。

それに気付いたのは、似てるよーで似てない、そんな女を知ってるからだな。

その女の名は吉岡夢美。その名の通りの、夢見る乙女のようにと云われているが、成績だけなら学年2位の才女である。

いつもポーツとしてて、時々コケているのを見ていた頃は、勉強は出来ても莫迦は莫迦だと思っていたが、付き合ってく内にそうではナイと知れた。

いや。

ルウイの底の知れなさに気付くまでは、それでも時々疑っていたのだ。

莫迦のフリではなく、本当に莫迦なのかな？

確かにまるつきし演技つてわけでもねエかな？って思うが、天然入ってるしな。しかし、それだけじゃねーな。うん。それだけじゃねエ。

家でも学校でも「あんなの」にひつつかれて、俺は息をつく間もない。せめて、部活くらいは付いてくるなと承知させたが、今度は「あんなのパート2」が居るんじゃないかと、少々悩まんでもナイな。

俺は眇めた眸で、多分剣呑な空気をそこらに振り撒いている。やっと一息つける、この場所で。

周囲の人間が遠巻きに声を掛けて来ないのを有り難く思いつつ、俺はため息をついた。

しかし、そんな気遣いの心とは無縁の女も居るもんで、そいつは入って来るなりツカツカと近付いて俺の横に立ち、

「あゝ。今日も不機嫌だわあこの人お！」

のんきそうに笑ってみせた、この女こそ。

「吉岡夢美。俺の傍に寄るんじゃないねエ！」

くるくるパーマのフワフワ茶髪に、天然ボケな言動の美少女。この女も何かと云うと俺にカラんで来る。今までは気にならなかったが、それもこの部活の時間のみだったからこそで、この3日間、俺はこいつに云い続けている。

「てめエが傍にいと、うっとうしくてやねエ。」

吐き捨てるように今日も云ったが、この女はひるむ事を知らない。

「ねえねえ。どうしてそんなに不機嫌なのお？」

好奇心に満ちたキラキラした眸でうつたえてくる。どうしてどうしてと、うるさい女だ。こいつは、不機嫌オーラが更に燃え盛る俺の様子に気付かないのか？ いや、気付いてい乍らも嫌がらせをする。それがこいつらなのだっ！

ム力つくッ！！

俺は今まで尋いた事がなかったが、何でこいつは俺に近付くのか。今までは好きにさせていた。珍しい生き物がまわり付いてくるな………くらいの認識しかなかったからだ。

何を云われても気にならなかった。

相手にしてなかったと云っても良いが………今は無理だっ！！

「お前が嫌いだからだ、吉岡夢美っ！ 嫌いな女にまわり付かれて、

俺は更に更に更にっ！不機嫌になるんだっっ！だから俺の傍に来んなっ！視界に入るなっ！声も聴かせるんじゃないやねエっ！！！」

流石に云いすぎじゃあ……って視線が四方から俺に刺さる。部屋の隅にグループを作って固まった奴らが、息をつめて俺たちを視つめていた。

「ええ……。でもお、あたしが居なくても不機嫌じゃなあい？」

この女はっ！

これくらいではっ！

こりたりなんぞっ、しないのだっっ！！！！

「うるせエっ！お前が更に更に不機嫌倍加させるって云ってんだろっ！嫌な気分が更に更に悪くなるんだよっ！」

「だからあ。最初に気分悪くするのは、何なのお？」

人のっ話をつ聞けいっ！！！！

この耳かっ！？

この耳が聞いてねエのかっ。

「いたっ、いたいいたいいたあ……いっ」

両耳を離すとクスンとでっかい眸をウルウルさせて俺を見る。

「耳がねエんなら、いらねエんじゃねーの？」

「謝るけど。あたしは川崎くんの傍、離れるのやなんだもんっ！たがら、その点だけは聞く耳持たないんだもん。だから元を絶てば、あたしの事をまた傍に置いて、まあ良つかあってエ、思っかな

あつて思っただもんっつ」

クスン。

しゃくりあげ乍ら云う。

この発言に部屋の隅の連中はどよめいている。

「冗談だろう？」

俺は頭を抱えなくなった。

うんざりするってのが正直な気持ちだ。顔は可愛くても、俺は普通の女の子が好きだよ。この性格だけは勘弁してくれって云いたいね。

「本気だもん！」

「何で傍にいたいんだよ。」

力なく訊いた俺に、ニツコリと笑う吉岡夢美。

もしや嘘泣きだったのか？

思わず疑ってしまう程、見事に、華やかに笑って

「だってあたし、面食いなんだもんっ！！」

握りこぶしで、力強く宣言された。

俺はモハヤ何も云えんわ。

もしかして、この手合いは俺にとって鬼門かも。早くも悟り始めてしまったね。敗北を認めたくはないが、何か……どうやったって勝てねー気がしてきたよ俺は。気のせいなら嬉しいんだけどな。

「ねエ。川崎はあたしの事、少しは好き？」

しかし脱力しきつた俺の腕を取って、こんな事を云う女に、俺は譲れない最後の一線だけは示さずにおれない。

静かに諭した。

「俺はな、お前の事が大嫌いだ。出来れば遠くで幸せになってくれ。俺がお前に抱く好意はそれだけだ。頼むから、俺に関わるんじゃないよ。」

吉岡は首を傾げた。

「少しは好きって事？」

「大嫌いだと云うとろーがつっ！！！」

頼むルウイ。

異世界に帰ってくれ。

ついでに、この女も連れてってくれ。

俺は心の底から祈らずにはいられない。

「ええと……。何か…食ってく？」

「ああ…そうだな。」

力なく俺は頷いた。

流石に部屋に居続ける気力を失った俺を、追いかけて来てくれた田町の友情が心に浸みる。

心配……してくれてんだろうな。
うん。

俺、おかしかったもんな。
例え怒鳴るにせよ、俺があんなに沢山喋るのは、もはや珍事と云
って良いだろう。口を動かさすぎて疲れたぜ俺は。
食欲はねエけど、帰宅すればルウイが居ると思うと、帰る気も無
くなるしよ。

……………。
もしかしくなくても、俺って……不幸なんじゃね？
気付いた事実は俺を打ちのめす。

「お前さあ、ちゃんと眠れてる？」
「毎日6時間キツチリ。」

睡眠くらいは確保しないと、やっていけないからな。

「そうか……………打たれ強いな。」
「……………」

どつという意味だろう？
褒めた……………ってのとは、少し違うよな。呆れてんのか？哀れんで
んのか？

どれも、当て嵌まらん口調だったような……………。

「弟……………のせいだよな。吉岡嫌うの？」
「…半分、な。部活だけなら許せたんだ。」
「そうか。」

今度こそ、同情をたたえた眸が俺を見る。

俺は溜まった何かを吐き出すように、嘆息した。

「まあ——大変……だろうなあ。」

それ以外に云い様がないって口調の田町に、俺は頷いた。

そう。

大変なのだ。

朝から晩迄「あんなの」付きまとわれてみる。しまいにや発狂するんじゃないかと、俺は自分が心配でたまらねエ。

「お前の周りってさあ、変な奴多いよなあ。」

「……………」

確かに多いが。自覚が足りないぞ田町。お前も相当変な類いだ。

だが、アレらに比べたら可愛いもんだし、俺は平凡が一番だと思
うが、だからと云って変人を差別する気はナイ。アレらみたいに害
を及ぼすなら別だが、田町は「俺には」害がナイからな。

それに田町は良い奴だ。

だから、友達をやっている。

「類友って云うしな。呼び集めるんだろうなあ。」

それは云えるな。

誰が集めるんだかな……まったく。迷惑な話だ。

うんうん。と頷く俺に、田町はフウとため息を吐いた。

長年の付き合いで、俺の云いたい事を違えず受け取れる田町である。

「……………る？」

小さく何かを呟いた田町に、俺は眸を眇めた。

普通は二ラまれた等と誤解されがちな俺の視線に、田町はちゃんと理解して「こっちの事」だと手を振った。

深追いはしない。些細な事にこだわっていられる程、今の俺には余裕がナイ。

いつ迄、こんな生活が続くんだろうな。

うつとうしい。めんどくさい。うんざりして、気苦労ばかりな上に、何だか毎日怒ってばかりだ。いつ頭の血管が切れてもおかしくない生活だ。

振り回されてるし。

本来の俺は、他人の言動に左右される事は先ずナイから、自分自身の変わり様が何だか不気味だとさえ思える。たまにキレても、ぶちのめせばスッキリするのが常だった。

なのに、あいつらは次から次に俺を怒らせる材料を持ち込むし、同じ事を何度も繰り返すのだ。もう、日がな一日怒ってなくてはならんのかってくらいに俺を怒らせる。

わざとか？

わざとなのか？

俺を怒らせるのは、そんなに楽しいのか？

最近の俺を見て、クールな美少年なんて誰も云えまい。「他人の言動に振り回される俺」……ありえねエ。しかし現実だ。

俺はこんなにも感情的な面を持っていたのかと、自分自身に驚くばかりだ。

こうして、アレら以外の奴と居る時には、多少口数が多くなったとしても、今までの「オレ」をはみ出す程の事はナイのだが……。

アレとの再会を遅らせたくて、ファースト・フードで不味い珈琲をすすってる時点で……既に終わってる気もしないではない。

情けない。

愚か者の見本のごとき己を嘆くばかりだが、だからって早く帰ってアレと対決したいとは思えねエ。つつか力いっぱい嫌だ。

立ち去り難い俺の心境を理解してくれるのか、田町はいつになく食べた。

トレイの中身を片付けたら次の注文をしに行く、心の友田町。

ゆっくり時間をかけて田町は腹を満たす。何も云わずに俺に付き合ってくれる様子を、友情を実感する。

田町は微妙な性格をしているが、俺にとっては凄く良い奴だ。

俺は田町が誰かの敵になっても、その誰かの味方はしない事をここに誓おう。無意識に田町が悪者設定だった。別に含むところがある訳ではないんだが……。

まあ、あれだ。色々……、最近嫌な事ばかりで、主にルウイとかルウイとかルウイとか吉岡夢美や吉岡夢美などだが……とは云え、

そんな日々でも慰めは存在するもんだ。どうせなら可愛い女の子だともっと嬉しいが……吉岡みたいなのが来る事を思えば、全然田町でOKだ。うん。

田町がこれ以上は食べれない、いや少しなら……とトレイをニラム姿を、友情って有り難いなあ、と眺める。

でもお前、食えずに座つくって選択肢はねエのかよ田町？

真面目な話、実際いつまでこんな日常が続くんか？

3日で疲れきった俺は祈らずにおれない。

異世界の神さまお願いします。そちらの迷い子を預かってます。すげえ迷惑な奴です。

出来るだけ早く、引き取って貰えないでしょうか？

カエサルモノはカエサルに。異世界のモノは異世界に。

ルウイ。お前との出会いは俺には不運以外の何ものでもない。マジ頼む。

早く帰れよ異世界に。

4話 本性く発覚く（前書き）

4話です。はい、エラソーな人出ましたww

本性 行動 帰還

で完結ですので、多分8話いくかどうかです。

14日迄にはムリでも今月中には終わらせます。
お付き合いの程、宜しくお願い致します。

4話 本性、発覚

ルウイ。こいつは俺が不在の時さえも、俺の部屋に居座つて何が面白いのだろうか？しかも退屈で眠り込んでしまったと思われる。

俺は取り敢えず着替えをして、スヤスヤとあどけなく眠る美少女面を見下ろした。

このキレイな顔を見ていると、無性に腹が立つのは何故だろうか？その疑問の解を得るよりも、この腹立ちを少しでも解消すべく行動を起こしてしまう俺は、少しばかり短気かも知れない。

「……っ！っ！いったあい。何すんのさ、もお！」

プリプリと怒る姿も、端から見る分には可愛いくてならん存在だろうとは思う。しかし、自分に関わった途端に、どんな害虫よりもタチの悪い相手と化す事は間違いない。

俺は渋々起き上がった。こいつに再度ケリを入れる。

「ニヤッ！」

コロナと転がって恨めしげに見上げてくる視線を無視して、ベッドに腰掛けた。

ルウイは俺を警戒をし乍ら、少しばかり距離をとって上体を起こした。

首を傾げて俺を見上げる顔に怒りはない。むしろキョトンとした

大きな眸は素直そうで澄み切っていて、理不尽な暴力など受けた事もない無垢な子供の様だったりするからタチが悪い。

「機嫌悪いねエ、何で？」

俺は無言のまま、懲りずに近寄って来たルウイの襟をとった。

ねじり上げると苦しそうにもがきつつ、それでも暴れようとはしない。恐々とした眼差しですらなく、何とか宥めようと笑みを浮かべるルウイがまた腹立たしい事この上ない。

「何で怒るのさ。俺、何かしたあ？」

「俺はな……、お前の顔を見るだけで腹が立つんだ。」

強いて云うなら、吉岡夢美と同じ台詞も非常にムカついたが。この際それは置いておく。

「エエエ？生れつきだもん。かんべんしてよお。」

こいつらに共通する力が抜けそうな話し方も、半分くらいは置いておく。

「ついでに、莫迦のフリしたその言動も気に入らねエ。」

淡々と俺は云ったが、どんなに怒鳴られても平然としたルウイが、さぐるような視線を返した。

気の所為かと思うような、一瞬の事ではあったが、俺は逃さず追い詰める。

「莫迦じゃないのは解ってた。いい加減に本音を話し合おうや。」

「……それとも、本気で怒らせたいか？」

「……………怒らせたくはない……………かな？」

まだトボケルつもりかと、俺は目をすがめたが、ルウイは手を振って、取り敢えず離してくれと云う。

ここで逃げられては、たまらない。真意を計りかねニラむ俺に、ルウイは咳込みつつ観念した。

「……………殺されるかと思った。」

ゼーゼーと息を整えるルウイは、それが本来の姿なのか、クスリと皮肉な笑みを浮かべる。

「まったく。警戒されまいとして、逆に取られちゃたまんないよね。」

そう云って見返す眸は、どう見ても無邪気さとは無縁の表情で、何だかウンザリして悲しくなった。

これが、一時でも心惹かれた相手かと思うと非常に虚しい。

「でもねエ、云っとくけど別に何を隠してる訳でも無いんだよ。」

「……………。」

それを信用しろと？

こいつは本気で云うつもりだろうか？

ルウイは困ったように笑う。皮肉まじりの、穏やかとは云い難い空気をまとう笑みで、ますます不信をつのらせるシロモノだったが、ルウイはそんな事には構わないと決めたらしい。

「どうせ疑われてるなら、取り繕ってもムダだしね。ダメし切れないなら本音で話す方が、俺としても確かに気楽ではあるよ。」

無邪気どころか邪気にあふれ、性悪と呼ぶのが相応しい、不遜かつ傲慢とした態度で人を見下す。

ルウイ……、俺は確かにお前が猫を被っていると気付いてはいたが………そこまでやるかよ。今のお前が本性だと疑いもしないが――。

全然信頼出来ないぞ。何を云っても疑惑を招くぞ。

俺の沈黙をどう見たか、ルウイはフンとせせら笑う。

可愛くねエ！

どんなにキレイな面でも、この性格はどうしようもない。イヤな奴としか思えないヤローである。

「俺の云う事なんて、信じられないと思うだろ？」

まったくだ。

この眸。この笑み。この態度。

どこを取っても信頼性皆無と云えよう。

友達にしたいくないタイプNO1の座は俺サマのタメにあるっ、てルウイの表情が云っている。
しかし。

「ここで頷いても、話が始まらねーだろ。」

嫌々乍らも、云うしかない。

惘然とした俺にルウイは笑う。

エラソーでイヤな奴丸出しの、笑顔より嘲笑と表現するのが相応な笑いに、早々とウンザリして逃げ出したい俺。

「俺はね、こんな奴だからさ。良いのは顔と頭と身分だけってよく云われるんだよ。」

的を射た指摘だ。そいつとは意見が合うだろう。

俺は失礼乍ら力強く頷いた。

「俺としては、それだけ良ければ充分だと思うんだけどさ。」

他が悪すぎるだろう。

人間中身も大事だぞ、絶対。

俺が云うのも何だが……。

「確かに他人の手が欲しい時は不利なんだよね。」

肩をすくめてルウイは笑う。

他人の手助けなんて、別に要る訳でも無い……と、その笑いが語っている。

「俺に出来ない事なんて、滅多にあるもんじゃないから、然したる不自由も感じないけどね。」

自信に満ちた眸。

ならどうしてあそこ迄、正反対の人格を演じる必要があったんだ？俺はそう思った。

いくら来た途端は呆然としても、その後の態度は自分で選択したもんだろう。

疑問に応えるようにルウィは云った。
オレサマな表情に、ほんの少し苦さがまじる。

「地球は普通、干渉してはならない土地だ。いくつかの例外を除いてね。」

何と云ったら良いのか……と呟いて、初めて、戸惑いがルウィの顔にのる。

困ったようなその眸は、初めて見た時の天使の顔と……確かに重なった。

イヤあな事実気付いてしまう。

俺が間違っただけで恋した天使は、演じる前のルウィだった。

天使と云うより悪魔じゃねエか。

無邪気なフリをしていた時は、かなり抜けた印象を与えたルウィだが、こうしていると抜けているどころか、かなり聡明なタイプである。

性格が何処までも自己本位で、何か企んでいるのではと警戒されるタイプでもある。

そりゃあ、このままの奴に何を云われても、協力など出来なかつたろう。少しでも記憶を覗かれるのはイヤだな。絶対イヤだ。例えば知識だけだと約束されても、信じる事が難しい。

何故なら。

こいつからは人を人とも思わぬ不遜さと共に、人を陥れようとする底意地の悪さを感じるからだ。

それを、こいつ自身解っているのだろう。

「俺に協力しようなんて物好きは、そうそういるものじゃないから

ね。まずは地球で暮らす為のパートナーが欲しかったんだけど、そのパートナーが見つかったのに助力を仰げないんじゃないか仕方がないかな。」

だから、違う性格を演じたと云う。

「もう少し、ダマし易い奴を探せば良かっただろう。」

俺は嘆息した。こいつの演技は中々だった。俺以外の奴ならダマせたと思う。

もちろん、俺がダマされなかったように、こいつの裏に気付く奴もいるだろう。だからと云って、それが少数派だって事まで、認めない訳でもない。大多数はダマされるぞ。

確かに、こいつは頭が良いんだ。

「それなりに捻つてものがあるんだよ。」

「最初に逢った奴でないとダメとかか？」

俺の言葉にルウイは笑う。

「最初にエッチした相手だよ。ま、似たようなもんだけどね。」

似てない。

似てないぞルウイ！少しは拘ってくれ！何でそんなに無造作なんだお前は！？

心臓がバクバクいつてる。

やっちまったもんは仕方ないが………と思いかけて、気付いた。

「やらなきゃ、他の奴にしたのか？」

「当然じゃないか。とは云え、俺が跳んで来た事にも驚かず、俺の姿にも動じない、そんな奴は滅多に存在しない。性と意志を受けなきゃ、こっちの相手に力の干渉ができない事を考えると、お前がケダモノだったのは悪くない仕儀だったと思うね。」

ケダモノと云われても、俺は何も云えない。
しかし。

「お前に驚かない奴は居ないだろう。」
「お前の他にはね。」

俺だって驚いたと云ってるんだ。気付け莫迦！
怒鳴りそうになって、聞き捨てならない台詞に思いとどまる。

「やらなきゃ力が使えない？」

いや、そんな云い方とは、また違ったような。

「やった相手が認めてくれないと、使えないんだよ。」
「……………。そのせいで、手の内をさらしたのか。」

納得。

つまり、それが掟って事か。

「聞くけど。俺が最初から今の態度で話しかけて、知識見せてくれた？」

「見せる訳がない。」

「他の人を見て良いと云った？」

「……………他の奴でも良かったのか？」

頷いたルウイに俺は舌打ちした。
クソッ。それならそうと云えよ。

「他人がどうなろうと知った事じゃない。」

そうして欲しかった。
心から。

「今からでも良いから、他所にいけ。俺が許す。」
「イヤだ。」

何がイヤなんだ。
それとも、もうダメなのか？

「せっかく理解者に恵まれたのに、今更動くものか。」
「良いから出ていけ。俺はお前に関わりたくない。やり直せ。」
「ムリだって。お前は俺が此の世界にいる間、家族として過ごす事を認めた。それは一種の契約だ。やり直しは確かにきくが、お前が俺のパートナーになったのは変わらない事実だ。お前が認めない限り俺は力を使えない。その上、この性格にひるまないお前を俺が手放す訳もない。」

そう云って、せせら笑うルウイに俺はクラリと目眩を覚えた。
何を云っても効果がない。

何でこんな奴に関わるハメになったんだ？一体俺が何をしたんだ？

「ま、俺を抱いたのが不運と諦めるんだな。」

そう云って、天使の顔をした悪魔は哄笑した。
高笑いが非常に似合う。

何処までもイヤミな笑いかただった。

5話 本性と真偽

「……………」

それでっ、跳ね退け

どうしてっ、殴る

こいつはっ、押しやり

いつ迄もっ、蹴り飛ばす

俺の隣で寝るのだっ！ヨシよく飛んだ

「ったゝ！毎回毎回、気安く蹴るなよっ。納得したんじゃないのか？」

仮面をはいだルウィは苛立ちを隠す事なく抗議を入れる。

誰が納得するもんか。俺はそう簡単に平穏とオサラバ出来る程、

人間が出来ていないし、災難を仕方がないと受け止められる程、悟ってもいないんだ。

「大体どうして一緒に寝る必要がある。」

「云ってなかった？」

俺の不機嫌は既にこいつにとって、ごく当たり前の光景と取られているらしく、ルウィはケロリと云いやがる。

眉を潜める俺に、床から這い上がり、ベッドの端に腰掛ける。

「お前の体温を少しでも貰わないと力が衰えるから。」

「……………」

どういう意味だ？

「一度寝た事で、ある意味、俺達は繋がってるんだよ。だからこそお前の合意なしには力が使えない。これは解るな？」

解りたくないが、頷いた。

「つまり中継地点がお前の中に有るって事なんだが、それに触れないでいると、俺の力が吸い取られるばかりなんだよ。だから出来るだけ俺はお前の傍に居るって事になる。」

俺は唸った。

ルウイは困ったなと首を傾げる。

その仕草ひとつ取っても、人を小莫迦にしているとしか云い様のないイヤミったらしさで、こいつ、友達いないだろ？と云いたくなる。

「そうじゃねエよ。納得したくないんじゃない。納得出来ないんだ。」

ルウイが俺に嘘をつかないのは、もう解っている。

掟に縛られているから、告げようにも告げられないのだ。しかし。

「何か隠してるだろ。」

そう。

全く違う人格を演じて見せたように、隠し事などは実に多い。今も、都合の悪い事を云わずにしていると、俺には解る。

「何を？」

ルウイの見下し笑いは、別に何かを隠してるからと云う訳ではない。これは単なるデフォルトで、天性のものだと理解する。性格の悪さが滲み出で、何か企んでいるように見えるが、これが彼本来の姿であつて、本当に企んでいるかどうかは、また別問題である。だから、態度で気付いた訳ではない。

思い出せ。

昨日の話を。

「そんなに一緒にいなくても、良い方法がある筈だ。」

そうだ。

他所に行けと云った俺に、イヤだとは云つても、その可能性を否定はしなかった。

隠し事はする。

多分。それはもう山程の。

しかし嘘は付けない。

「違うか？」

そんな奴には、それ相応の尋き方がある。

イエスカノーで答えさせれば良いだけだ。

案の定、ルウイはイヤそうな顔で俺を見下ろした。

「何で、そう思う？」

「何でだろうな。で、どんな方法があるんだ？」

応えたくなさそうに、ルウイは口ごもり、けれど仕方なさそうに

ため息を吐いた。

隠し事はしても、問われたら応えなければならないのも、掟のひとつらしいと気付いていた。

「セックスだ。一方通行の力を、交流させる。チャネルを変えるのは、その手段だけ。しかも、一定期間しか保たない。」
「どれくらいだ。」

例え、どんなに動揺しても、それを表面に出さずにいられるってのは、果たして良い事と云えるんだろうか？

「24時間。」

却下。

「…………聞きたかったんだが。」

ふてくされた様子のルウイに俺は問い掛ける。

「お前の世界も、時間の流れとか、地球と同じなのか？」

「…………？多少、違うかな？何でそんな事聞くのさ。」

「随分と、こっちに合わせた魔法を使うからな。」

こんな云い方で通じるかな？

何て云うか…………確かにこいつは、俺から知識を盗まなけりや異邦人丸出しだったと思うんだよ。だけど、ちょっと知識を覗いただけで、こんなに溶け込めるもんだろうか？

例え、先祖が一緒だとしてもさ。

「…………。」

ルウィは開きかけた口を閉じて考え込んだ。

聞いちや不味い事だったかな？

そう思った時。

「まいったな。何て云ったら良いのか、解んないや。」

困ったように、そう云った。

「確かに違っただよ。風習も、掟も、何もかも……と云えば云える。だけど、お前の云う通り、地球での掟は、何て云うか……こっちの流儀に則するんだよね。」

そう云って、また沈黙する。

俺は口を挟む事なく待つていた。

他の人間はどうか知らないが、俺は沈黙を居心地の悪いものとして捉えないので、唯々無言のニラみ合いも、苦になる事はない。

「心を覗くのもそうだけど、向こうでは当然の事もこっちでは違っだろう。地球での掟は、………地球の為って云うか、地球の人間に影響を与えない為って云うか……。」

つまり、こちらの規準に合わせて、迷惑でなく影響を残さないように、適宜即した掟が定められている。

と、そういう事か？

充分迷惑だが、確かに領けない事でもない。

俺は無事に、俺として此処にいる。記憶を変えられた人たちも、単にこいつを知人として受け入れる事以外は元のままだ。

俺が「郷に入りては郷に従え」と云ったままの行動を、こいつは

取っているに過ぎない。

地球に干渉してはならないって掟は、確かに守られているんだと思う。

しかし、その割には干渉せざるを得ない掟が有るつても、また事実なんだよな。

一体どーゆーの？セックスでの力制限とかメチャ原地人に干渉してない？

「例外って云ったな？それはお前の行動にも含まれるか？」

「えっ？……ああ、そう。いくつか…ね。その例外のひとつと、俺と関係あるよ。確かに……。」

けれど……と、ルウイは云う。

「悪いけど、それは云えない。云いたくもない。」

「どんな場合でも云えない事か？」

ルウイにダメされない為には、しっかりとした確認が不可欠である。

それを裏付けるかのように、ルウイは舌打ちした。

「例外は……ある。」

「どんな？」

「……云いたく…ない。」

苦しそつに云う。

俺は無視を決め込んだ。

「どんな？」

重ねて問うと、ルウイは悔しそうに唇を噛んだ。
質問には応じなければならぬ掟が、ルウイを苦しめているのは解っていた。しかし、一体どういう掟なんだかな。ルウイは呼吸をするのも苦しそうだ。

そして。

俺を射殺しそうな眸で視つめて、ルウイは云った。

「恋人には、告げても許される場合が……多い。」

ムリヤリ云わされた事は、彼のプライドを逆なでしたらしい。
キツとニラんで。

「お母さ〜ん！洋が俺んこと泣かすう〜！！」

叫びやがった。

バタバタと音がして。

階下から物凄い勢いでやって来るのは

「弟を泣かすなと何度云ったら解るっつー！！」

容赦ない蹴りを息子に喰らわせる、母だった。

俺は逃げる間もなかったね。

クソッ。

莫迦っぽい弟は、俺にこそ嫌われていたが、母には愛されていたのである。

本性は更にタチが悪いし。

俺も性格が良いとは云えないが、お前に比べたら百倍マシだぞ！
心の中、叫ばずにおれなかった。

だから！さっさと帰れっ異世界に！！

6話 行動とその前に日常

ルウイが云い渋ったのは2点。

セックス問題と恋人発言だ。

まあ、気持ちは解る。

つまるところ、奴は俺とベッドで仲良くしたくないのだ。恋人にだって当然なりたくはあるまい。

そんなのは俺だって良く解る。

誰が男とそんな仲になりたいかって云うんだ。

ついでに、だ。

俺にそれを云いたくなかった気持ちも、認めたかないが、理解しないでもない。ケダモノ行為に及んだ俺が、しょっちゅう引っ付かれてるより、一発やっちゃえっ！てな考えに走らないとも限らないと、ルウイは警戒したんだろう。

俺の自業自得と認めよう。

そこ迄は百歩譲るとしてもだ！

ムリヤリ云わされたからって、そこ迄怒るなよ。イヤ、怒るのは当然の権利と認めてやっても良い。

答えたくない質問だったろうからな。

パートナーだと俺を呼んだ後で、恋人になら秘密を告げられる等と云いたい方がおかしい。想像せずにおれないからに決まってる。

俺のケダモノな行動はルウイに安心しろよとは、とても云えない代物だったと自覚している。

しゝかゝしだ！

やり方が汚いだろう。

俺は母に蹴りを喰らった後、朝食も抜かれた。

非難に満ちた視線を、父親から浴びせられた。

母は涙を浮かべた弟を抱きしめて

「メチャ可愛いぜっ！」

と愛情を深め、俺に対して非情になった。

元々、愛想のない俺は、母の愛情を刺激しない息子なので尚更なのだ。

父は母に似た俺の顔を愛しいと云うが

「女の子じゃないから。」

どうでもいい、と云う。孤立無援の可哀相な俺なんである。

マジ哀れだぞ、俺。ちょっと悲しくなってきたかも。

人間空腹な時は殊更に悲観的になるのか、それとも俺だけか、何だかもう、この街で一番不幸なのは俺かもって気になってきて足取りも重くなる。

「川崎イ、おはよう。」

語尾にハートマーク付き。聞くだけで可愛いらしい声に、俺は足を早めた。

振り向けば、見るだけなら愛らしい顔が、満面の笑みを浮かべて小走りに追いかけて来ているに決まってる。
隣でルウイが歩みを止めた。

ええい！立ち止まっても良いから手を離せっ！

嫌がらせか！？

嫌がらせなのか！？

朝のあれじゃ飽き足らないのか！？

「吉岡さんだっけ？」

「そうよん。留衣くんね、よろしく。」

「うん。邪魔しないから二人でゆっくり来てね。はい。」

「ありがと。うれしィ。」

おいおいおい！

ルウイ。お前タチ悪すぎってもんだぞ！

ルウイに手渡された俺の腕をガツチリと捕まえて、ふわふわの髪をゆらしてニツコリ見上げてくる吉岡に俺は怯んだ。

決して逃がさない、と云ってる顔だな……これは。

「吉岡夢美。腕を離せ。」

「イヤ。せっかく貰ったんだもの。学校につくまでくらい腕組んで歩きたいもの。」

大嫌いだと何度云われても変わらない、その笑顔。

嬉しそうに笑って吉岡は云う。

「川崎と一緒に歩けるなんて夢みたい。」

そうか、悪夢だろう。

しかし、この腕を振りほどけないのは、やっぱり…何つつかな。しがみついてくるから、当たるんだよ。

何かと聞かれても困るが。

吉岡は顔と声だけでなく、体もかなりイケてる女だ。

ちょっと自分から離れるのは勿体ない、と思ってしまっくらいには豊かな胸をしている。

いつもは声が聴こえた途端、逃げの態勢に入る俺だが、体当たりで来られると少し弱かったりする。色仕掛けとも云うな。フッ。

この女も無邪気そうな形で心得てるから、ぐいぐい胸を押し付けてきて、ちょっとヤバイだろそれはっ！て感じた。

平常心、平常心。

公衆の面前でしゃがみ込むのは避けたいぞ、俺は。

「川崎は今日も部活出るんでしょ？」

「出ない。」

「えええ？残念。川崎出ないなら私も出ないけどお。ね、じゃ一緒に帰る？」

「約束がある。」

「もう！誰と約束してんの？私も一緒じゃダメ？」

「ダメ。」

「なあんでエ？」

俺は立ち止まると吉岡夢美から腕を引きはがした。右手を剥がせば左が、左手を剥がせば右手が絡み付いてくるので、少し難渋したが、鞆を小脇に両手首を取るとジタバタと暴れつつ半分諦めた顔をした。

俺は吉岡夢美をじっと見つめた。

「よく聞けよ？」

「うんっ」

視つめられて嬉しいつ。と吉岡夢美の眸がキラキラと輝く。
俺は視線を逸らしたいのをぐつと堪えなければならなかった。

「俺はお前が嫌いだ。お前の傍にいと気分が悪くなるんだ。だから……吉岡夢美。」
「うんっ」

ニツコリ。全然聴いてない笑顔の吉岡に。俺は声を低めた。

「頼むから、俺に近寄んな。」

辛抱強く云い聞かせても、吉岡夢美はニツコリと笑う。

「イヤ。」
「フザケろよ、てめエ！俺はお前のそういう所が嫌いなんだ！俺に触んな。俺に近寄んなつ。話しかけんなつ！解ったかつつ！！」
「やだつてば。云ったでしょう？私は川崎の顔が好きなの。一生付きまとうつて、決めたんだもん。」

一生？

一生っ！？

冗談だろう？

俺は余りの不気味さに手を離れた。すかさず絡み付いてくる手から後ずさる。

「てめエ、それ以上寄るんじゃないねエ！」
「いやだつてば。どうして解ってくれないの？川崎あたしの事好きじゃないの？」
「嫌いだつて云ってるだれろうつっ！？」

ストーカーに追われる恐怖って、こんな感じかも知れん。何とも言葉には云い表し難い気色悪さ。俺は怯えていたと云っても良いだろう。

この女相手の敗北は恥では無いような気がした。
とにかく逃げるが勝ちである。

「ちょっと待ってよ、川崎イ。ねエったら。」

吉岡夢美。お前の望みだけは聞けんっ！俺も自分が可愛いからなっ！！

机に鞆を放ると共に、俺は踵を返して振り返る。

ニッコリと隣の席で悪魔が笑った。こいつは俺以外の前では猫を被り続ける事に決めたらしく、実に愛らしい笑顔である。

眼差しひとつ、仕草のひとつひとつが、こつも違うか。

此処に居るルウイは、人の庇護欲を掻き立てる、小動物にも似た存在だ。現に周囲の人間は、俺の態度を感じしないって眸で見る。

「ルウイ。素直にゴメンなさいって云ってみな？」

ルウイは首を傾げる。

俺、何か悪い事した？とその眸が告げる。実に無邪気な様子だ。

「ルウイ。俺にはお前が邪気のカタマリに見える。」

「えええ！？何それ？」

両頬をグイと引っ張って、暴れるルウイを押さえ込む。

「か……川崎？」

「うわあ……痛いかも。」

辺りにたむろしてた連中は、長い付き合いである。こんな時、非難はしても、俺を止める勇氣は持たない。田町くらいは出来るかも知れないが、奴は皆と同じように安全圏まで逃れつつ、面白そうに見物人と化すのが常である。

まあ、俺が弱い者イジメはしないって奴らは知ってるからな。培った信頼っての？

「いひやい
い
い
い
い」

椅子から転がり落ちてでも逃がしやしないぜ。殴る蹴るだと暴力だが、この程度ならオフザケで済むからな。まあ、やられる方は一発殴られた方がマシ！と云うかも知ないけどよ。

俺はこのまま絞め技に入るか、情けないイジメをケンカに見えな
いから周囲も大人しい。このままの方が良いかも。

「いゝゝひゃゝ」

「そうか。痛いかな。」

もっと痛くしちゃえ。

押さえ付けた軀を、端からは解らないように痛め付ける。今日の俺は卑劣くんが入ってる。

ほれ卑劣くん。

こっちは卑怯くん。

「~~~~っ!!」

多少不自然でも、口の両端を引っ張られて、表情は読み取りづらいし、声も出し難い。

タチの悪いオフザケが入ったイジメは、実は念入りな暴力だったりする。こいつが本当に、軀の弱い弟だったら意識はあるまい。

まあ登校してる時点で病気は単なる人嫌いつて事になるから、普通はイジメてる俺が心配される立場じゃね？

奴らチカラ暴走させるんだもんよ。

「――」

ジタバタと、生意気にも反撃を試みていたルウイが、大人しくなった時点で、俺は手を離れた。

肘や足など、押さえ込んだ態勢はそのままだから、ルウイはまだ動けない。

肋骨辺りの痛みの所為か、ルウイは顔をしかめて俺をニラみ上げた。

「ひど〜い。」

眼差しは少々険悪だが、言葉の調子は莫迦っぽい。
大したもんだ。

俺は笑って立ち上がる。

「……………」

手を差し延べると、ルウイは呆然としている。

俺は首を傾げた。

後にひくような痛み付け方は、しなかった筈だが、弱い子ぶりっ子のひとつかな？

「どうした？どっか痛めたか？」

「いや……」

慌てて起き上がり、顔をしかめる。そりゃ痛かろう。何でいきなり動くかな？

らしくないルウイに、俺は眉を寄せた。

「ええっと、ありがと。」

俺の手を取って礼を云うあたりは、充分に抜け作だが、今ひとつの演技でもある。

俺は眸をすがめてルウイな眸を覗き込んだ。

「……平気だ。……ってば。」

そう云って、眸を逸らしたルウイは、顔を赤く染めている。

何なんだ？？？

新手の企みかな？と、思わないでもないが、まあ良い。人前で追いつめるのも何だしな。

人前と云えば、他の奴らも何か変だ。見回すと皆が皆、申し合わせたように、俯いたり、そっぽを向いたりして、しかも一様に顔が赤い。

……もしかして。

と、ルウイを見る。

席に着き、教科書を机に押し込む姿は、もう普段通りである。けれど、さっきのアレは、つまり。

俺、そう云や笑ったかな？

無意識の行動は、時に周囲の状況で自覚させられる。

そんなに強烈なのかな？俺の笑顔って？

普段が仏頂面だから、特に心臓に堪えると、田町などは云う。

その威力は爆弾並みだとか。

自分が楽しくないから、どうでもいい事実だな。

何故なら、怒鳴るより余程効くからと、笑って見せても意味はないからだ。

皆、さりげに眸が良いのか、それとも無心の笑顔にそれだけ威力があるのか……。考えても解らないので、いつも諦めるしかない。

誰か写真でも撮ってくれりゃ良いのにな。

当の本人なんだから、一度くらい見せてくれたってバチは当たるまいに。鏡に向かって笑って見せる虚しさを知る俺である。

「ルウイ。ちょい上向け。」

「何？」

仰ぐように見上げてきたルウイは、キョトンとしている。

既に全くの平常心のようだった。生意気な。

「今日は一緒に帰ろう。」

耳元に口を寄せて囁くと、ルウイはマジマジと俺を視つめた。

「何企んでんのさ。」

小声で云い返すルウイに俺は笑った。

当然のように固まったルウイに、あ…と思う。鏡を持つときや良かったな。

一日に2度も笑うなんて、かつてない事だ。

雨降らねエよな？

我乍ら、窓の外を見上げずにいられない自分が虚しい。

どうせ、人工の天気なのに時々予報を外すのが意味不明。
だが杞憂だったようだ。

空は青い。

燦燦と照り付ける太陽は眩しいくらいだ。とても崩れそうにない
天候である。

今日は街に出るので、有難いと云えば有難い天気だった。

7話 行動く帰還日は結局いつだよ？

何故、街に出るのか？

それはルウイの希望である。

昨夜、Boxを眺めつつルウイは云った。

「これ、試したかったけどな……。」

「そう云えば、チチンパイで出さなかったな。」

「……チチンパイはやめろ。」

嫌そうに見据えられた。

すぐに視線を俺のBoxに戻して嘆息した。

「長期の滞在なら、一応支給されるんだが……それでも申請時の注意点とか半端ないんだぞ。」

「…………。」

何でまた？

所詮デジタルじゃねエの？そりゃ、人類の半分近くはBoxの世界しか知らないけど……生身はそれぞれ別の場所に存在するんだし。

正直、リアルに紛れ込まれる方がビビるんだが。

疑問を提示しようとした、その時。ルウイは云ったのだ。

「帰る前に入って見たかった。」

「良かったら使うか？」

「えっ？」

是非使え。そして帰れ。うん。俺は全然構わない。
ルウイは呆然としている。

「や…でも… ホントに？」

あの厭味な顔付きが、うっかり天使に戻って、ちょっと中身が中身だから嫌あな感じがした。

コレに惹かれるのは… ちょっと……………。

「でもこれ、パーソナルデータ、ダダ漏れになるんじゃない？」

「あ、平気。俺Box殆ど入らねえから。多分誰も俺じゃないとさえ気付かねえ。」

「…………… そんな莫迦な……………」

だって、Boxでは実際の顔とは限らねえし。

何たって俺はBox内データ、リアルで誰にも渡してねえもんよ。
放出禁止してるし。

一応、アッチの学校にも在籍してるが…………… なんと一度も出席してねえんだな…………… って。

「ちょっと待て。」

「やっぱりダメだろう？」

寧ろ安堵したかのようなルウイ。
ちげえよ。

「俺がBox通学するって云った時は、お前も行くって云わなかったか？」

「……………」

云ったよな？うん。俺は聞いた。

「……もしかして、お前に付いていくなら、特別許可が出るかも？」

可愛いフリなんぞ、今更利く訳ねェだろ。

「もし？」

「試す価値は有るかなあと？」

ん？やっぱり連絡は出来ないのか？

「さつきは支給とか云わなかったか？その場合はどうやって手配するんだ。」

「……………お前の云うチチンパイで。」

魔法かよ。

もしかして？が付く魔法って……………怪しい超能力みたいじゃね？

「ダメな場合はどうなるんだ？」

「……………多分、死にはしないと……………暫く寝込むとか…かな？」

こいつ。

結構……………。

「お前って、自分の世界では、もしかして学者とかそういう系？」
「そういう系とか云うな。……………何で解った？」

うん。

何か、自分が興味持ったものに対してはスゲー莫迦なところが、学者系。

それにしても異世界人に言語の乱れ指摘されるってどうよ？
知ってて乱してんだから良いんだよ。放つとけや。

「で、使うの？使わないの？」

「……つか……う……わない。」

「……それ、どっちだよ？」

呆れた。

尚も一人葛藤するルウイが不気味だった。

「……いや……でも……やっぱり。」

まあ勝手にしろや、と放置したら、結構な時間が経過して返却された。

「使わねエの？」

「ノーマルタイプに干渉する事は禁忌だ。」

きっぱり云って、Boxカードを俺の胸ポケットに勝手に突っ込み、その癖……未練らしい顔。

「ノーマルタイプ？その区分けだと、俺とか学校の奴らは何になるんだ？」

「お前らはレア種だろう。」

はあっ？

いや、2階梯からリアル許されるんだぜ？

そりゃ2階梯の奴らは、あんまり登校しないけどよ。
レアって。

「千年前なら、みんな表に居たから、接触くらいで煩く云われる事もなかったらしいがな。……まあ俺は人間なんかより、このシステムが気になるんだが……地球独自のシステムだ。」

と俺の胸ポケットを透視してBoxカード見てるんじゃないや？って熱の籠った眼差しが凝視する。

う。今カード持ちたくないかも。

何だろう？こいつの眸って、アレだよ……時代劇とかで見る……オタク？みたいな。

確か昔の日本にはアキハとかアキバとか云うオタクの聖地があったとか……歴史の授業ではアキハバラが有力な説だったか、ちよつと眉唾なトンデモ系の歴史的な割に、研究する奴らは大真面目だ。

「まあ良い。システムはともかく、表は大分観光したし、そろそろ帰る手配をしよう。」

「観光……したか？」

いつの間に。

と、思ったが。

ルウイは重々しく頷いた。

「ああ。学校などは千年前の日本を模した状態だと云うしな。興味深かった。」

だが、そんなものよりシステムが……と云いたげな眼差しが、実はかなりの執着を示して、ちよつと怖いんだが。

パルスの世界に関わる事くらい、リアルに紛れ込むよりマシじゃん？等と、純粹に云えなくなりそうだ。

アツチって実は知識と技術さえあれば、割と何でもアリらしいからな。

階梯が高くて、Boxにしか出掛けない奴が存在するらしいが、そいつらは大概かなりの違法ショートカットを駆使すると云う。

俺には解んねエ世界だが、ルウイはもしかして……その手合いなのかも。俺のBoxで犯罪はやめろ。

やっぱり使われなくて良かったかも知れん。

「お母さんと一緒に買い物も行った。人込みが無いのは仕方ないが、アレもデータで知るレトロ仕様で中々面白かった。」

あの母と買い物？

それこそ、いつの間に……。

「取り敢えず満足したから帰る。」

ああ、そう。

何だか色々情報入って、ルウイ帰還の喜びが湧かないが……いや、良い事だよ。俺は大歓迎だよ。しかし。

「どうやって？」

「……聖架プロダクションという会社に行く。案内しろ。」

命令かよ。

つつか何で芸能プロダクションだよ？

出し抜け過ぎる。

高笑いして「諦めろ」と云われた時は、まだまだこの生活が続くのかとガク然としたもんだが……、どういう心境の変化だ？ つい先程の事だぞ？？？

それとも……単なる嫌がらせ発言だったのか。有り得るな。

俺はため息を吐いた。

帰ると云うのだが、もう考えるのはよそう。こいつに振り回されるのも最後かと思えば、耐えられる。

そう思って、俺は黙って頷いたのだ。

ルウイの説明によると、彼等の仲間が日本に滞在する場合、その容姿の美しさから、モデル等を仕事に選ぶ安易な人物が少なからず居るとか。

「よく来るのはリー・一族で、彼等の場合は、恋愛済ませたらさつさと帰るし、自分勝手な奴らなんで、プライバシーが保てない仕事なんて滅多に選ばないけど……。それでもキレイな人間が多いから、興味は持つようだ。」

どうも面食いの集団であるらしい。

「キレイってのは凄く価値のある事だ。チカラそのものだよ。心も軀も能力も、総てが美しければそれだけ素晴らしいんだ。」

彼等の価値観は、美に重点が置かれている。

そもそもリー一族とやらの血を引く故に、跳び間違えたと言うル

ウィである。リー家の人間と違って、処置をしてないからパートナーなしにはチカラも使えず、それも限定されるとか。

「処置って？」

「色々。元々リー家の奴らは、チカラの抑制を覚える為にこっちに来るんだ。人間と交わる事で、道を作って開放する。気の高ぶりが、そのままチカラを暴走させる彼等が、恋を覚えて生まれた時から心の枷を取り除く。それでも大丈夫なように、お目付け役と一緒に来るんだが、星ひとつ潰しかねないチカラだから、暗示に近いものが掛けられている。」

「……………」

長々しい説明をされたが、全く解らん。

もう少し簡単に云えねエのかよ。

「俺はこっちに来なきゃならない程、リー家の血は濃くないし……つまり、チカラの有無じゃなくて、仕来たりなんだけど。だから、カギが心に無いから、こっちではそのまま、リー家の血に反応した掟が軀に負荷を掛ける。」

「どういうんだ、その掟って？」

首を傾げた俺に、ルウィは笑う。

「うん。地球そのものに掛けられた魔法。リー家の奴らは、その魔法に引つ掛からないように処置して来るのさ。魔法は地球を護る為のもので、それが無ければ、こっちの世界が危険な程の暴走を招きかねないチカラを、俺が有してるって事だね。」

「……………」

つまり、ルウィが暴走したら、地球が破壊されちゃうかも？でも

って、そのチカラが大きいと、掟が適用されて安全弁が発動する？
納得しかけたのに、ルウイは更に難しい事を云う。

「でも俺は心のカギが無いって云ったろ？つまり、俺にとってはリ
ー・一族がこっちで学ぶ事は既に修得済みなわけ。」

解る？と云われても。

俺は考えつつ解答を導き出す。

「つまり……お前にとって、その安全装置は要らん事でしかない？」
「正解。」

一種のセーフティーの役割をする、地球が持つ魔法は、リー家の
血筋に反応する。そのチカラの大きさ次第でセーフティーも強く作
用する。それに引掛からない様に、処置をしてリー家の人間は来
る……そのセーフティー代わりとなるお目付け役と一緒に。

安全弁など無用でしかないルウイが、何の準備もなく跳ばされて
来て、その装置に引掛かった。それで、リー家のお目付け役と同
じ様な役目として、パートナーが必要だ……と、そういう事か？

こいつは説明が下手だな。

「お前……自分の考えや知識を、人に伝える術を学べ。」

やっと今迄の事態を納得した俺に、ルウイは非常に嫌そうな顔を
した。

「莫迦と語る趣味は持たない。」

「……………」

謙虚さも学べ。

俺は心の底から思ったが、まあ良い。

こいつはもうすぐ帰るんだ。

まさに今。 帰る手配をしに街に出たところじゃないか？こいつの周囲の人間達には気の毒だが、こいつは帰還するのだ。

あと少しの我慢だ。

いや……。

ちよつと待て。

だが手配？とやらをしたとしても、実際に帰る迄にどれくらいかかるかは不明だと気付いた。

何て事だ…… うっかりにも程が有る。

ガク然。

立ち止まり立ち尽くす俺を、ルウイは不審そうに振り返り、すぐ納得したように頷いた。「ああ、ここか。」

いつの間にか到着していた。

「ルウイ。」

「何？」

「今日手配したら、帰還日はいつだ？」

「さあ？」

さあ？さあって？さあってどついつ事だよ……！

「早ければ明日かも知れないし。一年後かも知れない。交渉と便次第だろう。」

かなりな衝撃だったが、手配しない事にはルウイを帰還のルートに乗せる事すら適わない。

俺は深く嘆息した。

諦めるな、俺。

ルウイに任せきりにせず、総てを見て、口出し出来る場面を見逃すな。

もしかしたら。

本当にすぐにルウイは帰るかも知れないじゃないか!!

日本最大の芸能プロダクション。聖架プロの前で、俺は自分自身を鼓舞した。

「やっぱり入るの?」

「来るつつつたのはお前だろ?」

俺は気の進まない様子のルウイを、有無を云わさず連れてビルの中に入った。

受付で親父の名前を出して

「身内です。此処にいるって聞いたんですが。」

「第2会議室ですね。お待ちになりますか?」

Boxカードで身分証明すれば、丁寧な応対をされる。
まあ俺は階梯だけは高いからな。

「いえ。忘れ物頼まれたので。」

エレベーターの中で、ルウィは俺を詐欺師と称した。
やかましい。

「それより、大丈夫なんだろうな？」

「大丈夫だよ。聖野グループの芸能部門って此処の事だろ？」

その通り。

だが、それだけに…俺と列ぶ階梯持ちも居るぞ……。ルウィの言葉なんか知らねエとか云われたら、いくら俺でもヤバイ気が。だが、ルウィは当然のように自信に満ちている。

しかし、本当か？

聖野グループのトップと、ルウィの世界は交流があると云う。そして此処の社長は、ある種の連絡ポイントだと云うのだ。

「大丈夫だよ。これでやっと帰れる。」

「……………」

その台詞。もう少し、努力見せてから云えや。

あっさりと云われて、言葉に詰まる。

それを望んでいたのは俺だ。

早く帰りやがれとも思う。

だが、もしも明日ルウィが帰れるとしたら、それは随分と……呆気ないような、そんな気がするじゃねエか。

……………いや、騙されるな俺。さっきの「さあ？」を忘れたか？それとも、一貫した嫌がらせ発言の続きなのか？

もはや、俺には判断がつかない。

「こんにちは。エリジュアスの者です。」

社長室に入った途端に、ルウイはそう云った。
広々とした部屋は、ホテルの一室のようである。

振り返った青年は多少険のある色男だ。こついつのを美形って云うんだな……と思わせる。モデルか何かなら、顔を知っていてもおかしくは無い筈だが。

どっかで見たように思いつつ、どこで見たかと首を捻ってしまう。

「林さん。今日は……その。」

「良いでしょう。明日にでも来ますよ。」

林…清親だ。この世界…芸能界の天才と噂される男。と、云つても自ら芸能人を名乗つてもおかしくない美貌だが、裏方としての才。スターを育てる才、仕掛け人として、の天才だ。

親父が云つてたし、確か雑誌でも見た。世界的に有名なモデルの、トール・サキヤのマネージャーでもあるとか。

林さんは、ドアに手を掛け乍ら俺を見下ろして。

「モデルになるつもりが有るなら、連絡をくれ。」

楽しそうに云つて、出て行つた。

あんたの方がよっぽどキレイな顔してるじゃないか。そう云いたかったが、シャイな俺は無言で聞き流した。

それにしても、ルウイではなく何故俺なのか。

「ええと。」

遠い目をする社長サン。

何だか気の毒だ。

「エリジュアスの……。」

言葉が続けつつ、何でこんな事に付き合わねばならないのだろう……と、その顔に書いてある。

「そう。比奈瀬・ウイドマーク・那利香姫と連絡を取りたい。」

とぼけたフリしてないで、さっさとしろとばかりの態度でルウイが云う。

エラソーな態度に、社長は多少ムカついたような目付きでルウイを見やる。

「お名前を伺っても宜しいかな？」

「惑星フライサ。ホッククテン北国転の王子。ルウイリアンシーカイリアス。」

「……………左様で。」

再度、遠くを見つめた社長サンの気持ち、俺には良く解る。
非現実すぎて、ついてけないんだよな。
それでも黙り込んでばかりも居られないしさ。

社長も諦めた様に嘆息して、机上に手を伸ばし、通信機のスイッチを入れた。

「ハイ社長。どちらにお掛けかしら？」

金髪美女が立ち上がる。社長……割とミーハーな人だな。

「成見さんに、連絡を取りたいんだがね。」

「あらあら、女王様に？そう云えば日本に帰ってたかしらね。ちょっと待ってて。」

テーブルの上を小さな美女が横切って、携帯にも便利なTeiBoxに入り込む。

「お久しぶり。声だけで失礼するわ。何の御用かしら。」

「ああ。エリジュアスのお客様がいらしてるんですがね。」

「……………どちらの国の方？」

「フライサの北国テンの……………王子様らしいんですが。」

「……………お連れして。誰か案内をお願い。家に……………いいえ、マンシヨンの方に帰るわ。」

会話は短かったが。

これって、成見那利香だよな？

柔らかいトーンの、独特な声。上品で、優雅で、女王様みたいなカリスマだと有名だ。

大女優のナリカ・ナルミ。

もしかして逢えるのかな？

ちょっと期待してしまうかも。

ドキドキ。

ミーハーな俺だった。

最終話 帰還〜意外な事実〜

それにしても安易だ。

こんなに簡単に済む事なのか？

ならば、この4日間って……本気で単なる観光だったんだろうか？

何事もなく、俺達はマンションの一室に案内された。

そして、俺の親父と同じ世界——つっても畑違いだが——に住む、とは云え一生縁を持てる筈も無かった大女優の部屋で、その大女優に面会を果たした。

う……。ちょっと興奮してるかも。

メチャ心臓ドキドキして緊張してるかも。

彼女はゆったりと長椅子に腰掛けて、俺達を見上げた。
五百年間、大女優で在り続けた女の、流石の貫禄の笑みは天女のようにだった。

「どうぞ。お掛けになって、王子様方。」

く~~~~っ！

めっちゃめっちゃイロツポイぜ！

感動かも。サイン欲しいかも。美人だなあやっぱり！

腰を下ろした俺達の前に、甘い香りの飲み物が出された。

紅茶………だろうか？

ティー・カップに入ってるし？

「あちらのお茶ですね。こちらにいらしてからは、お飲みになれなかったでしょう？」

うつ。

アヤしい。

ちよつと飲むのを遠慮した俺だった。

ルウイは平然とカップに口を付けている。尊大な態度も、この気品も、こうして見ると、王子サマらしく見えない事もナイ。

「で、どちらがルウイリア殿下ですの？」

「……………俺だが。」

ルウイが不審そうな眼差しを大女優に向けた。

何か変な事を云ったか？

「判らないのか？こいつはパートナーだ。」

「……………まさか、人間だとでも？」

「そうだ。……………と思っていたんだけどね。」

二人はじつと俺を視つめた。

もしもし？

オソロシインですけど。

この際、ルウイが俺を視界に映した途端にエラソーな口調を、少しばかり砕けた物云いに変えたのは不問としよう。

こいつ、まだ多少は猫を被ってやがったな。

残っていた猫の存在にウンザリした俺だったが。

そんな事とは知らない大女優が、少し首を傾げて云う。

「私の所にいらしたのですもの。何かトラブルがお有りなのでしょう？」

トラブル係なのか？

日本が誇る大女優が、異界人のトラブル解決係とは知らなかった。世の中奥が深いぜ。

けれど大女優はもつと奥が深い事を云ってくれた。

ルウイが簡単に事情を語れば。

「……まさかとは思いますが。本当に何の意味もなく、こちらの人間の前に出たと、お思いかしら？」

「違うとでも？」

ルウイの眉が上がる。

おゝゝい。何だよ、その会話は！

「……リー家の香りがしますわ。だから判りませんでしたの。」

そして。

ナリカの説明はこうである。

たまたま跳ぶ時の事故で地球に来てしまったのは、リー家の血が、リー家の人間がよく通るゲートに反応した為だという推理に間違いは無いだろう。

その場合。

普通は直前にゲートを利用した、リー家の後を辿る筈だ……と。

その相手の近くか、でなくとも、相手の位置を気配くらいは辿る事の可能な範囲内に出現する筈。

それが無理な程の、過去や未来には、そもそも跳ばされない筈だと云うのだ。

筈、筈、筈と微妙なんだか頼もしいのか、よく解らねエな。

「途中に別のリー家の人間が居たから、軌道がズレたんですわ。」

「……つじつまは合致する様だな。」

合わさないで下さい。

俺は人間！……の筈なんですってば。

何か、イヤな会話だ。

俺は平凡を愛しているのに、ルウイに逢ったせいで、今度は異世

界人扱いかよ？

そりゃいくら何でも酷いってもんだろう。

「本人、ご存知ないようですけどね。」

と、俺をしげしげと視つめる大女優。

こんな場合じゃなかったらウキウキなんだけどな。

「よく判るな？」

「一応、この世界では演じる事を仕事にしておりますから。多少、読み辛いのは確かですけど………表情が余り動かなくとも、その程度なら。少々、驚いてらっしゃるようですよ。」

いや。驚愕してます。

少々どころか阿鼻叫喚だ。

余計な事は良いから、さっさとルウイ異界に帰して、俺は忘れる

事に決めよう。

うん。要らん。そんな事実。

「割と血が濃いようですから、ご両親のどちらかが、リー家のご出身だと思われますわ。」

「ふうん？ そう云えば二人とも唯人にしてはキレイだ。特に父親は、何か変な感じがしたな？」

「お気付きになれなかったのは、チカラが本来の状態ではない所為ですわね。」

勝手な話を進めるんじゃねエ。

俺は内心で悪態を吐くくらいしか出来なかった。

その悪態も、ちよつと力無い。人間のつもりで生きて来たのに、実は違うんです、って？ 納得出来るか莫迦野郎！

「では、その方に御依頼なさった方が宜しいでしょう。私がお帰しすると、それなりに外交的処置が持ち上がりますし。実は手一杯なものですから、一ヶ月ばかりお待ち戴くようになりますの。」

「……………一ヶ月。」

呆然と呟いてしまった。

それは、非常に不味いだろう。

俺の神経は4日で破綻寸前だぞ？

それを更に一ヶ月って！

「別にそれでも構わないけどな。確かに必要な金なら遣わずに済めば、それに越した事は無いな。」

別にルウイが散財しても、俺の懐が痛む訳ではないが。…………と云うより嬉しいくらいだけどさ。こいつが損するなら。

しかし。

一ヶ月のオマケ付きは戴けねエな。戴けねエよ。

「そうですわね。リー家の人間で、今こちらに永住している人物など、そうそう居るものではありませんもの。つまり……」

「口止め料替わりに頼めそう……かな？」

二人は共犯者の笑みを浮かべて視つめ合った。

「ちなみに、リー・シェイディでもリー・ディストミラルでも無かったのでしょうか？」

「違った。こいつはともかく、父親にディストミラルの血は無い。アレは、噂に聴いた、失踪者だな。」

何だその……ともかくつて。ついでに親父？もう何も聞きたくない俺だった。

だが、ちらりとナリカが俺を見て。

ニツコリと笑って云った。

「あなたのお父様つて、シェン・川崎でしょう？」

何で知ってるんだああああ！

クッソウ！

この流れでこう来たら、本気で俺は人間じゃねエのか！？

親父！！

許さん！！

「やはり、余り動揺してませんのね。ショック？と云うより、怒ってますの？表情が読み取り難い方ですわね。」

感心したようにナリカは云った。

「ああ。こいつの父親は歌手だったな。そう云えばリー・エディス・シエンは歌が上手だったと聞いた事もあったか。」

「ええ。昔から良いお声でしたわ。まさかエディスの総領息子がエリジュアスを離れて結婚も出来ないでしょうに。あっさり駆け落ちなさって、今ではアーティストと呼ばれても……単なる歌い手ですもの。」

「それも、リドマークの姫君の台詞とは思えないけどね。」

その女は役者なんぞをやっている。

人の事を云える立場かと、ルウイの眸が告げていた。

「うちは、兄妹そろって変わり種ですよ。」

「蒼月の利夜を変人扱い出来るのは、あなたくらいだろうね。」

クスクスと笑うルウイは楽しそうだ。

楽しそうだが……。

気に障る。

元はと云えばこいつのセイだ！

“ガッン”

俺は立ち上がるり様に、ルウイの後頭部を殴り倒した。

「……………っ！いつもいつも。気安く殴るなっ！何か恨みでも有るのかっ！？」

「有るに決まっつとるわっ！このボケツッ！！！」

むしろ、恨みしか無いと云えるだろうよ。

大女優は少しばかり……………呆氣にとられた様子だった。

「父さんは？」

帰るなり開口一番尋ねると、母は首を傾げた。

「さあ？明日迄には帰るんじゃないの？」

「……………そう。」

どうしても良さそうに応える母に、いつもは何とも思わない俺だった。が、ちよつとは思つ。もう少し興味持ったれや。一応愛しいダンナだろう！？とかな……………これが本当に駆け落ち夫婦なのかよ。

ナリカ・ナルミ……………情報ミスじゃねエの？

「珍しいな？苦手なんじゃないのか？」

「用がある。」

「ふうん。」

俺達の会話は短い。

代わりにルウイが愛想を振り撒いて、少しばかり親子の会話を繰り広げた。

まいったな。

さつさと帰って来ねエかな。

あ。Boxつなげば良いのか。

連絡したいなんて、初めての事だから思い付かなかったぜ。

俺は自室に戻ってから、Boxをポケットから取り出した。

スルツと小さな美女がカードの上に立つ。

「誰に？」

「親父。」

「オツケーオツケー！珍しい事もあるものねエ！」

豪快に笑ってカード内に引っ込んだ。

何でこいつ、こんな美人なのにこうかな？

いつも思うが、人格設定間違ったのか俺。

「少おし待ってね。ミーティング、もう少しで終わるらしいから。」

「どれくらい？」

「10分かそこらみたいよ。」

そして十分を過ぎた頃、親父から折り返された。

美女の言葉に頷くと、美女は親父の姿に変わった。

「どうしたんだい？珍しい事もあるもんだね。」

「……ルウイが人間じゃねエって、知ってたな親父。」

三度も云われた台詞は、敢えて無視した俺である。

薄情息子って言葉が脳裏をカスめたが、知った事ではなかった。
今大切なのは

「人間じゃないとはヒドいなあ。恋人だろう？」

「誰が恋人だっ！？」

呑気な台詞に怒鳴り付けると、親父はキョトンとしている。

「違うのかい？」

脱力。

そうだな。

こういう奴だったな。

だから関わりたくないのに。

「リー・シェン。俺は事故でコチラに跳ばされてね。酷く難渋してるんだ。出来たら送り返して貰いたいんだが。」

「……………事故？」

ルウイに代わると、親父は呆然とした。

そして。

「すぐ帰る。」

俺が見た事もない、真剣な顔で云い捨てて、姿を消した。

乱暴な切り方は、親父もショックを受ける事が有るのだと教えてくれた。

「それで？君は、俺を連れ戻すつもりなのかな？」

初めて見る顔だな。

冷たい笑みを微かに浮かべた親父は、何か別人のようだったりする。

妙に真剣な眸をして、帰って来るなり云った台詞がこれだ。
ルウイは例の見下し顔で云い返す。

「俺はリー家の事情に口を挟むつもりは無いね。君が希んだとしてもゴメンだ。」

その言葉に親父は少々戸惑い気味だ。

「君は……リー家の人間じゃあないのか？」

「フライサのテンの王子だ。君が家を出た後の事だから知らないだろうが、白で蒼位そういを戴さいている。」

それに何の意味が有るのかは知らねエが、親父には絶大な効果があった。

固い表情が解けて、ホツとしたように口調も和らいだ。

「そう……でしたか。」

良かった……と続けて、口元が緩んだ。

「どうりで偉そう……いえ。」

親父……。聞こえてるぞ。

だがルウイは気にしなかったようだ。

「そう。俺がエラソーな事に不思議はない。偉いんだからな。」

ルウイ……。お前の性格って、やっぱり。

親父もちよつと驚いたみたいで

「そうですか……。」

などと、マヌケ以外の何物でもない呆気にとられた表情で、相槌

をうつた。

返事のしようが無いのは解るが……、やっぱり親父には真面目な顔を長く続けるのは無理なんだな？

しょせんボケボケな父であった。

これが俺の親父かと思うと、複雑な心境にもなろうと云うものだ。

「ああ。じゃあ……取り敢えず、私の事は秘密にして戴くと云う事で。」

「ま、そういう事だな。」

あっさりと。

取引成立とばかりに。

話は纏まった。

ちよつと待て。

そこ迄、簡単に済むのか？

俺の苦痛の4日って……。

「洋。俺は本来の姿に戻る。」

「戻れば？」

何の気無しに応えた。

何を今更云うかな……とも思った。

当然の事だとも。

でも。

イキナリ戻るか？驚くだろうが！

ホントに。

一瞬の事だった。

俺の一言が終わらないくらいの間に。

サラリ。

波打つ青銀の髪。

クリーム色の滑らかな肌。

しなやかで……美しい天使。

瞬く眸は不思議な紫。

俺が、一目惚れした天使と、翼がない以外まったく変わらぬ姿である。

当たり前だが。

「ああ……やっと戻れたな。やっと帰れる。」

そう云つて。

悪魔かおのれは！？つて云いたくなるような、性格の悪さが滲み出た笑みを浮かべたが。

やっぱりキレイだ。

何かやだ。コイツ。

クソツ。最初に一目惚れしたのが敗因か？

帰るから……かも知れない。

もう、居なくなるから、少しだけ、正直に見る事が出来る。

すつげエ迷惑な奴だったけど。

エラソーでイヤな奴だけど。

思いつきり振り廻されて、二度と来んなって思うけど。でも。

キレイ……だよなあ。

溜息を……ついてしまった。

「では。」

「うん。」

と親父が云う。

ルウイが親父に頷き、俺を振り返る。

「洋。吉岡夢美によろしくな。」

「……お前はなあ！っ……………」

怒鳴り声は、尻切れトンボになった。

消えて。

しまったから。

嘘だろう？

ルウイが来た時の事を思えば、不思議はないのかも知れない。
でも。

こんなにアツサリと？

俺が殴る間もなく。

怒る間もなく。

掻き消えてしまった。

「……………すげエ。」

手品じゃないんだから。

これは少し……………ひど過ぎる。

余韻もヘツタクレもない。

バツサリ……………切り捨てられた気がした。

異世界に帰って、本気で思ってたのに。
いざ帰られると、呆然としてしまう。

「びつくりした。」

呟いた俺に、父は笑う。

「また逢えるさ。」

「……………それは……………」

イヤだ。

多分。

逢ったら、多分イヤだと思う。それは迷惑でしかない。

もちろん、それは気休めで、逢える訳も無いんだが……………何が一番イヤって、万が一にも再会して、どんなに迷惑して怒っても、また……………別れる時にはショックを受けるだろう自分が、めっちゃめっちゃ、ヒジョーに、すこぶる、イヤッ！！なんである。

まあ。

一度キリなら、人生には面白い事があるのね？で済ませられるって事だな。

そして。

日常が戻って来る。

いつも通り朝が来て。

ルウイの居ない、日常がある。

母はルウイの事を覚えてなかった。

父は知らないフリをしていた。

何だかなあ。

そして。

学校に行っても、誰にも、何処にも、ルウイの影はない。
俺の隣の席には、4日前迄とは違って、それ以前と同じように、
田町が座っている。

「……………謎だ。」

呟いた俺を、不思議そうに見上げる友人に、俺は首を振り、何でもない事を伝える。

何で机が増えたり減ったりするかな？

魔法って何でもアリなのかよ？

イヤ、増えたのは転校生の為に運んだんだから、イキナリ消えたのが問題なんだよな。

悩みつつも、俺は端やんの力作をスラスラと解いてイジメてやるし、友人達と弁当を食べたりする。

女の子にラブレターを貰って、嬉しいと感じたりもする。
平々凡々と時間は過ぎて行く。

そして。

部活では、この女に纏わり付かれるのだ。

「川崎イ。元気ない？」

無視。

「何か悩んでるの？」

無視だ。無視。

白い手が、搦め捕るように本を取り去って、俺は初めて顔を上げる。

「邪魔をするな。」

「留衣くんのセイかな？」

「……………」

ガク然……とした。

コイツって一体？

動揺しまくった俺だが、多分他の連中には判らない。俺は己の鉄壁な無表情に感謝した。

しかし、父親が人間では無いと知った俺に怖いものなどあるうか？
無い。

「よろしくと云っていた。」

今になって、この台詞の意味が解る。単なる嫌がらせでは無かったって事だな。

「そうお？川崎ってば相変わらずねエ。驚いてくれても良いのに。」

充分驚いとるわ。

驚きすぎて、どっかオカシクなったかと思う程だ。
世の中ってマジに侮れねエな？

「ねエ川崎。もしかして知ってた？あたしが人じゃないって。」
「知らん。」

まあ、普通の人間だと思った事もないが、だからと云って異界人と部活を一緒にしているなどと、一体誰が想像するかってんだ。

「ふうん？じゃあ、留衣くん的事、知ってて黙ってる人が割と居るって事は？」

「知らん。」

「つつか……マジか？」

「誰だよそれ？つつか割と？割とってどれくらい？？？
もはやパニック。」

「例えば誰だ？」

「知りたいような知りたくないような。」

「ちよっぴり怯えつつ、俺は尋いた。」

「吉岡夢美は愛らしく首を傾げた。」

「ん？そうね、田町とか？」

「……アレも異界人だと？」

「ガキの時から連んだ親友まで異世界生物？つつか、俺が云えた義理じゃねエけどよ。」

「どんよりした俺に吉岡は首を振る。」

「やあね、田町はドール持ちじゃないの。しかも本物のドール持ち。普通の人間があんなに高い階段な訳ないでしょう？」

「待て待てまで！！」

「詰め込み過ぎだぞ！吉岡夢美！」

「ツッコミどころが満載だ………普通の人間？」

いやいやいや…ちょっと待て。

整理しよう。

本物のドール持ち？

「なら偽物のドール持ちが居るのか？レプリカでもなく？」

「レプリカはロボットでしょ。ちゃんと契約してなきゃ意味がないもの。田町みたいに階梯変わった人はまず本物ね。」

「ドールが、何かするとか？」

「うん。確か田町って小さい頃ドールに治して貰ったんじゃない？」

そうだ。

それまでは、Boxと家の中しか知らなかったと云う。

「ドールは人間が好きだから、例外は居るけど…普通聖野や私達とは関わらないわね。だから田町は地球人。」

聖野も何か有るのか？つつか私達って何だよ……吉岡夢美と同類頂って、有り得ねえだろ。

「本物のドール持ちは第2階梯以上よね。特に田町なんかは相当強いかな。何たって私達と同じ第4階梯だもの。」

無邪気に、だが、他の部員に聴こえないように、吉岡は云う。

再度、俺は動かない表情に感謝していた。

でなければ今頃、相当醜態をさらしていたに違いない。

今になって思い出す。

『ノーマルタイプに干渉は赦されない』

あの野郎。

知っててバツクレやがったな。

ふつふつと、怒りが沸いた。

吉岡が咽の奥で、猫のように笑った。

「フフ。だから川崎って良いのよねえ。私ねエ、動じない男が好きなの。」

前言撤回しよう。

俺は自分のポーカー・フェイスが恨めしいっ！

何でこんな奴らに係わり合わなきゃならねエんだ！？

こいつもまた知りたくも無い事情教えてくれやがって！！！！

俺は怒りのまま立ち上がる。

「吉岡夢美。」

「なあに？」

「俺に近付くな。」

「どうして？」

どうして？

どうしてだと？

あれだけ云った俺に、尚こいつはそう云うのか。

たった4日の間に、俺は何度告げただろう。

覚えていないからと大目に見ていたら、ちゃっかり覚えていて、

しかも、人間ではないと云う。

そんな女は。

「嫌いだからだっ！」

そうだ。

嫌いだ。吉岡夢美。

何度でも云ってやろう。
頼むから気付いてくれ。
俺は。

「心の底からお前が嫌いだ！吉岡夢美っ！！俺の傍に寄るんじゃね
エっ！」

初めて。

俺が吉岡夢美に怒鳴ったのを見た奴らが、一斉に部室ね隅にと退
いた。

確かに田町は余裕そうだな。

それが普通なのか、見慣れたからかは、俺は知らん。
知りたくもナイ。

「虫ずが走る程っ！寒気がする程っ！！世界中の誰よりっ！キ・
ラ・イ・ッなんだっお前がっ！」
「そうお？私は川崎が好きよ。」

怒鳴られてる奴が、語尾にハートマーク付けて喋るんじゃねエ！
つつか。

「少しは俺の話を聞けっ！！！」

ルウイ。

俺は、やはりお前とは再会したくない。
こんな日常で、お前にまで付き合うのはゴメンだ。

キレイな、キレイな、天使を夢見て、俺はたまに切なくなるかも
知れない。

それでも。

俺は決して、お前に逢いたいとは思わないだろう。

………出来たら。

こいつにも、帰って欲しいな異世界へ。

そう思いつつ。

もし、本当に帰ったら。

また。

俺は、寂しいと思うのだろうか？

そんな事を考えた。

その日。

部室の中で叫ぶ俺は、もう一人の天使に捕まった自分を知っていた。

世の中って。

あなどれねエよな。

まったく

あの日、空き教室で

あの日、ルウイが洋に帰還を告げた日の事だ。
空き教室で天使が二人、対決した。

部室に行った洋が、短い平穩を享受出来たのは、その対決故である。

短すぎて、さっさと部室を後にする事にはなったが……。

ルウイは階段の手前で、一瞬足を止めた。

すぐに素知らぬフリで帰宅を急ぐつもりだったが、相手が眸を瞪り。

スイ……と、空いた教室を示すように顎をしゃくった。

面倒な……と、内心呟いたが、争いの種を生む訳にも行かないだろう。

しかも、どうやら相手はルウイに怒りを覚えている様子だった。誤解が有るなら解かなければならなかった。

無視出来ない立場の人間だったからである。

人間と云っても、地球のそれではない。

故に洋などは「地球の」と云う前置きを省き、「人間ではない」等と云う。

失礼窮まり無いが、ルウイは間借りする立場なので、極力小さくなっているのだ。

洋は否定するだろうが。

明らかに地球の産では無い、美しい少女である。

地球の、それもここ日本地区の色彩は、魔法による上書きだと、ルウイの眸には見てとれた。

1 番目の月。華月かげつの申し子の様な、紅蓮の髪がルウイには見える。茶の髪がふわりと揺れたが、ルウイの眸にはルビー以上のルビー、紅い月の炎が映るのだ。

「ルウイリア王子にはご機嫌麗しゅう。白の蒼位に昇られたとか、祝着に存じます。お祝いが遅れました事、お詫び申し上げます。」
「ユレイミリーヤ姫だったか。詫びには及ばない。私も、リー家の『旅』の作法は知るところだ。」

本来、白ならずとも、塔に上る時点で王家から外れるのが仕来たりだが、転の国では事情が違う。

一度皇太子となれば、玉座につくか死だ。死ねば次の皇太子が起つ。

王位についても同様で、死のみが解放の印となる。

ルウイリアは生まれて五年で才を認められ、兄を押し退けて皇太子に起った。

生まれて十年で、地上で暮らせない程のチカラに目覚めた。

塔に上がる日、ルウイリア王子は兄を代理の皇太子とした。

兄は王位を継ぎ、ルウイリアは……まだ皇太子のままだ。

次は兄の子に、そしてまた子に、と、ルウイリアは皇太子の代理を依託しなければならない。

皇太子をやめるには玉座につくか死か。
ならば、ずっと皇太子でいるしか無いだろう。

王家に生まれた者が少なくない塔で、唯一王家に列なったままなのが、転の王族なのである。

滅多にある事ではなく、ルウイリア王子は栄えある初の皇太子のまま神司となった人物だった。

その狷介かつ剣呑な人格とともに、特殊な経歴の持ち主として、ルウイリア王子は非常に有名人だった。

また、名前だけとは云え、皇太子だからそれなりに社交の必要性も発生する。

有名人だから呼びたいと、駄々をこねる人間が居るからだ。

白に所属する神司としてなら、鼻で笑うが、転の国を思えば、皇太子の義務を負う事も有る。

神司に無茶を云う人間もそうそう居ないから、それは稀な機会でもあった。

リー家のパーティーに出席したのも同様の理由である。

「こちらでは吉岡夢美と名乗っております。」

「私は川崎留衣と。」

そう告げた途端。リー家の姫の背後に紅蓮の炎が燃え立つ。

ルウイは眉をしかめた。

「そこですわ。」

「そこ?」

怒りに満ちた眸がルウイを睨む。

愛らしく、可憐な顔立ちだが、随分キツイ性格の様だった。

「ルウイリア様には、リー家の『旅』の作法をどの様にお考えですか?」

「何が云いたいのか、意味が解らないのだが。」

ユレイミーリヤが、キラキラと怒りに満ちた眸でルウイに告げる。

「アレは私の獲物です。印は付いていた筈ですわ!」

「……成る程。」

それで、洋に出逢った時、奇妙な感触があったのか。
ルウイは納得した。

「まさかディストミラル家を、敵にまわすおつもりですか?」

「私にはリー家の印は見えない。それに私にとってはパートナーでしかない。」

無礼では有るが、一応筋の通った抗議に、ルウイは冷やかな眼差しを向けた。

「本当……ですか?」

「いい加減にしろ。そなたこそ、俺を敵としたいのか?」

苛立ちを隠しもしない傲岸な視線に、ユレイミーリヤはハツとして眸を伏せた。

ルウイリアの短気はよく知られていた。

「ご無礼を。」

だが、すぐにスツキリと背筋を伸ばし、ニツコリと微笑んだ。

「ですが、わたくしが敵に廻るのではございません。デイストミラル家が……と申し上げましたわ。」

「リイナイル皇が、俺と争うと？」

そして、リー・デイストミラル・ユレイミーリヤ。

リー家の中でも高慢で知られる、リー七皇家の筆頭、デイストミラル家の姫が微笑った。

「川崎洋は、私の配偶者となります。」

「そうか……以前。デイストミラルの血筋が地球に失せた事があったな。」

「……………」

無言のまま、肯定するように、姫は頭を下げた。

もう何も云う事は無いと告げる態度に、多少腹は立つが……デイストミラル家を敵にする程ではなかった。

ルウイは納得して引き下がったのである。

「安心しろ。余計な手を出すつもりもない。」

「お気遣い、有難く存じます。」

やっとの事で言質を得て、リー家の娘は満足そうに微笑んだ。

そして。

ルウイは川崎留衣として、帰宅の途についた。

そうか。

洋はあの女と結婚するのか。

ディストミラル家が狙うなら、違わず仕留められるだろう。

ルウイはそう考えて、嘆息した。

ならば、あの手合いと、そうそう長く傍にも居られないだろう。

と、そう思った。

そして、洋はエデイスの直系の血筋でもあった。

父親はエデイスの直系。

母親は、本人が知らないまま、ディストミラルの当主の血筋だ。

永く、ディストミラル家には男子が生まれて居ない。

他家ならばともかく、あの家で女性が当主に立つ事は有り得ない。
洋程の血を持つ男子を、ディストミラルは決して諦めはしないだ
ろう。

誰も、ディストミラルに張り合って、洋を奪う事は出来ないだろう。

「やっと、帰れる。」

奇妙な考えから解放される。

綺麗で、乱暴で、賢くて、性格の悪い洋。

「吉岡夢美によろしくな。」

お前に同情してやろう。

あの女は手強いぞ。

ルウイが微笑めば、洋は怒鳴る。

お前みたいに乱暴な奴、見た事がないよ。

多分、もう逢えないだろう。

洋みたいな人間には、もう逢えない。

きっと、何処にも居やしない。

唄うように、ルウイは呟いた。

咽の奥で笑う。

パートナーを得る為に、媚香を使った事は云わずに済んだ。

隣で寝ても、決して手を出さなかった唐変木だが、洋は多分ルウ

イを忘れられない。

媚薬の味を、洋は思い出すだろうか？

思い出して、苦しむが良い。

ルウイはそう思って、唇の端を上げた。

一目惚れだったなんて、決して、一生、誰にも云わない。

ルウイリアの、心の中だけに存在する恋だった。

あの日、空き教室で（後書き）

最後まで、お読み戴き有難うございました。

ルウイ視点です。

洋がケダモノな訳ではナイと、書いておきたかったのと……ルウイが余りに解り難い愛情表現なので、このオマケ話は最初から考えてました。

余り可哀相じゃないのは何故だろう？と、本編中から謎だったルウイです。

洋の未来や、ルウイのその後を書くかどうかは未定ですが、機会があればまた宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6406x/>

ある日、天使が堕ちて来た！

2011年11月17日19時15分発行